

平成23年度三重県・三重大学連携 新博物館シンポジウム

「三重の近代史から地域の明日を探る」

日 時 平成23年11月19日（土）

13：30～16：30

記録集

場 所 四日市市総合会館 8階視聴覚センター視聴覚室

主催 三重県、国立大学法人三重大学

目 次

1	開 会	1
	主催者あいさつ	
	布谷 知夫（三重県立博物館 館長）	
	滝 和郎（三重大学博学連携推進室長）	
2	基調講演	5
	演題 「世界記憶遺産 山本作兵衛炭坑記録画について～田川市石炭・歴史博物館の取組～」	
	講師 安蘇 龍生さん（福岡県 田川市石炭・歴史博物館 館長）	
3	問題提起	17
	「地域の価値を明日に伝える」	
	菅原 洋一さん（三重大学大学院工学研究科建築学専攻教授）	
4	事例報告	
	事例報告 1	21
	「三重の近代史から地域の資産を考える～明治期の博覧会関係文書から～」	
	吉村 利男さん（三重県史編さん専門員、三重大学附属図書館研究開発室客員教授）	
	事例報告 2	24
	「博物館に関わる市民や県民の立場からの取組 三重の軽便鉄道 廃線の痕跡調査」	
	木下 辻松さん（三重県立博物館サポートスタッフ民俗グループメンバー）	
	事例報告 3	28
	「四日市市で地域資産を活用する取組～たいせつな「つながり」～」	
	久安 典之さん（建築家、四日市地域まちかど博物館推進委員会代表）	
5	パネルディスカッション	32
	「三重の近代史から地域の明日を探る」	
	《コーディネーター》菅原 洋一さん	
	《パネリスト》安蘇 龍生さん、吉村 利男さん、木下 辻松さん、久安 典之さん	
6	資料（配布資料・パワ ポイント画面資料）	45
	基調講演 「世界記憶遺産 山本作兵衛炭坑記録画について～田川市石炭・歴史博物館の取組～」	
	問題提起 「地域の価値を明日に伝える」	
	事例報告 1 「三重の近代史から地域の資産を考える～明治期の博覧会関係文書から～」	
	事例報告 2 「博物館に関わる市民や県民の立場からの取組～三重の軽便鉄道 廃線の痕跡調査～」	
	事例報告 3 「四日市市で地域資産を活用する取組～たいせつな「つながり」～」	
	シンポジウム内容に関連したパネル展示	

三重県・三重大学連携 新博物館シンポジウム

テーマ 「三重の近代史から地域の明日を探る」



1 開 会

進行：

ただ今から、三重県・三重大学連携新博物館シンポジウムを開催いたします。

シンポジウムの開催にあたり、まず、三重県立博物館館長の布谷知夫よりごあいさつ申し上げます。

主催者あいさつ

布谷（三重県立博物館館長）：

皆さん、こんにちは。三重県立博物館の館長をしております布谷です。

今日はこういうお天気の悪い中、多くの方に参加していただいて本当にありがとうございました。あるいは、このシンポジウムを連携という形で共催していただいております三重大学の関係者の方、あるいは、それぞれお忙しい中で、今回の講師やパネラーを引き受けていただいた皆さん方に心からお礼を申し上げます。

私どもの三重県立博物館は、ご存じかと思いますが、今年が開館より 57 年から 58 年になるという日本の県立博物館の中では最も古い博物館の一つです。残念ながら規模が小さかったので、なかなか情報発信をしたり多くの方が資料を使っていくということでは足りない部分があったわけですが、現在、公称をしております資料が 28 万点、あるいは、おそらく未整理の資料がかなりの数あるのではないかと思います。そういうものを使いながら、今日のテーマにもありますように、地域近代化というものも含めて、この三重の地を振り返り、あるいは歴史を考えるような活動をこれからも続けていきたいと考えます。

幸いにして、悲願であった新しい博物館の建物の工事が1月に始まりました。現在、最後の展示の準備や、あるいは、運営の方針等を作るような議論をしているところです。今日のプログラムもそうなのですが、三重の歴史、あるいは、これからの未来を考えるための場として、皆さんと一緒にこの県立博物館をつくる作業をしていきたいと考えています。これから先、開館が平成26年ということになっておりまして、大分時間がありますが、皆さんのご協力やいろいろご指導を得ながらやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。



今日、シンポジウムの場で私たちの博物館が考える地域づくりについて、みなさんと一緒に考えていくような場をつくっていきたくと考えております。今日は午後いっぱい4時半までよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

進行：

続きまして、三重大学博学連携推進室長の滝和郎よりごあいさつ申し上げます。

滝（三重大学博学連携推進室長）：

こんにちは。足元の悪い中、ご参集いただきまして大変ありがとうございます。

私、三重大学の理事・副学長をしております滝と申します。よろしくお願いいたします。僭越ですがごあいさつさせていただきます。

先ほど布谷館長からお話ありましたが、平成26年を目標として、現在、新しい県立博物館が建設中でございます。この新しい県立博物館に関しまして、県と三重大学とがお互いの持っている知的財産等を互いに利用して、また、新しいアイディアを出して協力しようということで連携協定をしております。大学としましては博学連携室ということで、会場の案内に名前があります菅原先生が中心になって今活動しておりますが、内容としましては、新しい博物館の展示の企画とか、今日行っておりますシンポジウムのような、県民の皆様が参加していただきますような文化的なイベント、こういうところを企画・実行していくということでございます。

本日は、その一環としまして、『新博物館シンポジウム「三重の近代史から地域の明日を探る」』というテーマで開催させていただきます。日本の近代化において三重県、あるいは三重県の各地域でいろいろな努力と試行が行われ、あるいは、業績が蓄積されたと思います。その当時、最新の施設、今は歴史的遺産・遺物になりつつあるでしょうけども、そういうものもたくさんあるように思

います。このようなことを記録・保存するということは非常に重要なこととございます。



私は実は脳神経科医でして、皆様の脳の血管の病気を治すために治療研究を行っていますが、私はどっちかというと発見というより発明のほうをやっております、医療機器の開発研究をしています。幸い今日本で20%ぐらいのシェアを占めるような医療機器を開発したのですが、そのうちに歴史的遺物になるだろうというふうに思います。やはりこれも記録・保存していただきたいなど、発明する側にしてはそういう気持ちでございます。そういう記録された資料をまた掘り起こして、今の現代の日本の状況に合わせて再認識、あるいは評価するということは、これからの地域、あるいは、三重県の、また、日本の将来に対しての新しい方向性を見出すとか、あるいは、新しいアイディアを出すことに非常に重要ではないかと思っております。

今日は、基調講演として福岡県の田川市石炭・歴史博物館館長の安蘇龍生様にお越しいただいております。安蘇さんは、そのパネルにあります山本作兵衛さんの作品をユネスコの世界遺産に登録されるのに非常に努力されました。それで今年の5月に認可されたということで、大変おめでたいことと思います。

山本作兵衛さんの作品、自ら炭坑夫としての日常生活、あるいは炭坑夫の家族の生活、あるいは、炭坑の町で使われた施設、あるいは、文化活動を克明に非常に臨場感が溢れる絵で描いておりまして、私、テレビで見させていただきましたが、非常に興味を持って見させていただきました。そういうこともあり、今日は安蘇さんのお話を大変期待しておりますのでよろしくお願いしたいと思います。

基調講演に続きまして、三重県で行われた事柄、特に近代での歴史を通じて、それらの各分野でのお話をご専門の4人の先生方にお話しただけと思っております。問題提起、事例報告、その後、パネルディスカッションの順番で進めていきたいと思っております。最後まで皆様のご興味を引くように企画したつもりでございますので、ごゆっくり最後までお楽しみいただければと思います。

簡単ではございますが、私のごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございます。

進行：

それでは、簡単に本日の日程などについて説明させていただきます。

お手元の資料の表の見返しに日程がございます。この後、基調講演をいただき、その後、休憩を

はさみまして問題提起、事例報告、パネルディスカッション、意見交換とさせていただきます。終了は4時30分を予定しております。

お手元のアンケート、こちらの黄色い資料に挟み込んであったアンケートですが、お帰りの際に会場出口の回収箱に入れていただきますようご協力御願いたします。

なお、携帯電話等はマナーモードにさせていただくか、電源を切っていただくなどご配慮をよろしく願いたします。

2 基調講演

演題

「世界記憶遺産 山本作兵衛炭坑記録画について～田川市石炭・歴史博物館の取組～」

講師 安蘇 龍生 さん（福岡県田川市石炭・歴史博物館館長）



進行：

それでは、基調講演に入らせていただきます。

講師には田川市石炭・歴史博物館館長の安蘇龍生先生をお招きしております。安蘇先生は、平成18年から田川市石炭・歴史博物館館長に就任し、地元大学と連携して、山本作兵衛炭坑記録画の世界記憶遺産への日本初の登録に尽力されました。本日は、「世界記憶遺産 山本作兵衛炭坑記録画について～田川市石炭・歴史博物館の取組～」と題してお話をいただきます。

それでは、安蘇先生、よろしくお願いいたします。

<基調講演で使用了関係資料は記録集 P. 45～P. 52 に掲載>

安蘇：

皆さん、こんにちは。ただ今、紹介いただきました、福岡県田川市に住んでおり、その石炭・歴史博物館の館長を現在6年目になりますが、やらせてもらっておる安蘇でございます。後のスケジュールがきちっとしてますので、とにかく時間内に終わることだけを目指にがんばっていきます。

さて、今、ご紹介のように皆様本当にご存じのとおり、「山本作兵衛」という名前がいきなり世界に出たんですね、それにつきまして今日は少し経過と中身と、実はそれがいかに大変なことなのかという愚痴っぽい話を、まだそこまで来てせんでもいいぞと言われるかもしれませんが、してみたいと思います。

私直ぐ飛んじゃうか忘れますので、愚痴っぽいほうからいきますと、実は私どもは作兵衛さんの記憶遺産というのを全く頭になかったわけですね。変な言い方をして申し訳ないですが。そこで、お手元に資料をそのために作っていただいておりますので開けていただきまして、大体、そもそも何から始まったかと言いますと、世界遺産運動からですね、皆様方の黄色い表紙を開けていただきまして、「田川市石炭・歴史博物館だより」という私の報告がありますが、ここに経過をつぶさに書

いておりますのでご覧になっていただければいいのですが、一緒に読むだけの時間は多分無いですから、私も学校の教師上がりだから、すぐ後で読んどいてくださいって、大概読みませんね。分かっとるけど、やっぱり言ってしまう。

それで、実はこの世界遺産運動は、いわゆる幕末、明治、時間で言いますと、1580 年から 1910 年の幅で、アジアで唯一独立を保ちながら発展した国が日本なんですね。その挙句が隣の国に迷惑をかけたりして良からぬことをいたしました、それはさておきまして、そういう面でヨーロッパからも関心を持たれている国ですが、その日本の近代化を背負った中心地域の一つというふうに限定したのが、山口、九州であります。実はそれが今は膨れまして、岩手県も入りましたし、静岡県も入りましたから、ひょっとしたら今日の朝、四日市市立の博物館を非常に丁寧にご案内いただいて勉強させてもらったんですが、可能性が出てきたなという感じもあります。これは生糸産業ですね。これも世界遺産を目指しているところありますね、名前言いませんが。私どもとライバルで競争していますから、あまり申し上げてもしょうがないです。よそと関係する話もあるし、今回の私どもの世界遺産の流れの中にも入ってくるんですね。

始まりは平成 17 年度でありまして、鹿児島県が旗揚げをしました。幕末、明治と言えば薩・長で出てくるんですけども、鹿児島県で鹿児島宣言というのを知事さんを先頭にやりまして、いろんな近代化の先導をしたところを文化遺産として研究しようやないか。できたら世界遺産を目指そうということを打ち上げたのは鹿児島宣言であります。

翌年 18 年になって、これがそこに出ておりますが、お手元の資料 3 ページ（記録集 45 ページ）の上のほうの「平成 18 年度の動向と取組への胎動」のところにありますから、後で見てもらいますが、九州地区の知事会で行政政策として近代化遺産を取り上げて走ろうやないか。目指すは世界遺産だということですね。そして取り組んだわけですが、今度はその下のほうですが、2 番のところにありますが、筑豊が最初はここでは落ちていました。そして、八幡製鉄が入っていたんです。皆さん北九州に入られたら、八幡のところに 1901 年と書いた溶鉱炉の跡があります。これは鉄道から見えますけども、あれが入っていたんですね。私はむくれたわけですよ。石炭史をやる者としては、製鉄が入って、その製鉄の燃料を供給した筑豊が落ちとるなんて、この世界遺産の構想は間違っとなると。偉い先生たちいっぱいおるんですけど、自分勝手に言ったわけですね。

それでこれは田川もやらないかんということで立ち上がったわけですが、そこからが大変なことです。私がいくら個人で気張って見たって意味がありませんが、田川には、ここの三重大大学の規模と比べたら小さな大学ですが、福岡県立大学という大学がございまして、ここに福祉関係の学部がありまして、その中に地域おこしで非常に生き生きしている学者さんを先頭に、田川というのは一番ここで陥没している地域だということもあって、県を挙げてこ入れせないかんということで大学を置かれたという意味もあったと私は見ています。いずれにしても、そういうことで地域おこしに非常に頑張る先生方が多い大学です。そこの先生たちと手をつなぎ、そして、県大を舞台にしてとにかく地域活動をやるやないかということで始まったのが世界遺産活動の元でした。結果としては県立大学も地域振興ということでプロジェクトを作ってやろうということでいろいろ知恵を絞って、国からの支援金等をもって地域活性化のプロジェクトを組みましたが、その中の一つに世界遺産運動を進めるというプロジェクトがありまして、私はそこの責任者に入るんですね。したがって、活動の初めから県立大と私ども、あるいは田川市とが連携しているという部分があります。

もう一つ大事なことは、さっき三重のいろんな取組を聞いても、私たちの遙か向こうに行ってる先輩でありモデルになるようなことを、今日も後で出てくる話もそうですが、やられていて、私も

逆に勉強して帰ろうという今日は確信を持ったわけですが。そういう中で一つ県立大と話し合ったのが、官・学・産・民、つまり田川市と経営陣、経済界、それから大学と民間の人たち、この4者が力を合わせた運動が要るということで、これを立ち上げました。トップには県大の学長さんに座ってもらって、後はそれぞれの団体が連携した共同代表ということで、私も田川市の博物館として入っているんですが、副会長という形で、それぞれ連携と独立性を持つという形でやったんです。その面倒を予算的に見たのが県立大学、県立大が見るわけなんで、国から予算もらってそれで作っているんですね、そういう形で進めてきたわけです。それがやっぱり一つベースになっていることを、今日は地元の博物館を見させてもらって改めて思い起こしたことです。

さて、この調子だったら60分すぐ経ちますから、そこで、話を飛ばしますと、実は平成18年度、文化庁にさっきの6県の知事さんたちが専門家に委託して出した推せん書の枠の中には入ってなかった。そこで、19年度継続審議として文化庁が判断したもんだから、継続審議なら自分たちも入る余地があるということで、19年度はまずオブザーバーで入って、できたら候補の企画に入れてくれと運動して、これが成功したわけですね。それで、結局19年度になって文化庁が推薦書を受けて、それをユネスコに持っていく流れになって、ついに20年度になって、それがユネスコの暫定一覧表に私のところの二本煙突と堅坑櫓も入ってくる。それから、皆さんお聞きでしょう、伊藤伝右衛門邸というのがあるんですが、この2つが地区を代表する遺産として入り込んだわけです。その後、走っておりましたが、それがすぐに外れていきました。

結論を言いますと、平成21年の10月22日に東京でシンポジウムがありまして、そこで筑豊の代表である田川市の旧三井の堅坑櫓と二本煙突及び飯塚市の伊藤伝右衛門邸は、世界遺産の対象にはしませんが。関連資産としては大事だけれども外しますということでした。東京のシンポジウムには、田川出身とかいっぱい呼びかけて参加してもらったから、がっかりしたんですが、その席で山本作兵衛さんの記録画は記憶遺産に運動したら可能性があるといきなり出たんです。前に全然耳打ちされていないんですね。そこで、記憶遺産とはなんですかから始まったのが、この運動です。

聞いてみると、世界遺産は3つのパターンがある。皆様方はご存じかもしれませんが、一つは、自然とか建物とかという我々が知っていた内容なんですね。これは有名。現在、日本が全部で16になったんです。それから、無形文化の世界遺産、能とか狂言とかですね、これが18です。それだけになっているんですが、もう1つ記憶遺産、これ横文字で「Memory of the World」と言いますので、史料と訳すのか、記録と訳すのか、記憶と訳すのか、いろんな訳し方があると聞いていますが、政府・文科省は記憶と訳してましたから、それに習おうということで記憶遺産と言うんですが、これがその運動にふさわしいと言うわけです。しかし半信半疑でした、皆さん方のお手元資料の4ページ（記録集46ページ）の下の方に、提言書に見る「筑豊田川の記述」というのがありますが、これは何かと言うと、先ほど言いました10月22日の東京のシンポジウムで、そこは世界遺産になりませんと決められたその報告書です。外国の先生も入っているから英語で、鹿児島県知事が会長さんですから、その会長さんに手渡されたわけですが、それを日本語にして我々に送ってきました。その日本語を見たら、5ページ（記録集47ページ）の左の上にあるような文章がずっとあったんです。そして、筑豊というのは非常に重要であること、このことを位置付けながら、世界遺産の対象はない。

ところが、その文中にあるように、真ん中より読んでみますと、こう書いてますね。「1910年伊田堅坑で生まれ、日本で最も愛されている民謡、炭坑節の中でも『あまり煙突が高いので、さぞやお月さん煙たかろう』、これは言うときますけど、田川の話ですからね。これは三橋美智也が「三

池炭鉱の上に出た」で歌ってくれたもんやから、カラオケでみんな三池と言ってるけど、わが田川です。それだけ言っときます。これは三池も認めましたから、余談ですが。それで、炭坑節の中でというのは読みましたが、「こうした無形文化遺産は大きな意味でコミュニティーのアイデンティティやプライドの基盤になっている。」このとおりなんですね。そして、「山本作兵衛の炭坑絵画は、炭坑のコミュニティーの生活のすべての様相を描写する日本における炭坑記録画の代表作である。同氏の特出したコレクションは現在、田川市石炭・歴史博物館に保管され、ユネスコの世界の史料遺産」、ここは史料遺産と訳していますね、Memory of the World、今は記憶遺産というのが一番使われているようです、「への申請が田川市を中心として検討されている。」まだ検討してなかったんですけど、そう書いてもらったもんですから、それならばじっくり取り組まねばというようになったんですね。

それで、問題なのは田川市は、夕張が財政であんなふうになったでしょう。田川市も似とるんですよ。走るときに金どうするかが出てくる。第一、この年は世界遺産の活動に何百万という分担金を払ってる。途中であれだめになったから、今度は記憶遺産でやるから金ちょうだいと言ったら、多分議会の皆さんは、おまえ、ちょっと頭冷やしてこいというのがおちですから、これは言うてもとおらんばい。じゃ、金はどうか、金は要らんといこう。じゃ、どこでつくるか。先ほど会を作ったといいましたね。産業界と民間と大学と博物館で作りました。ここで寄付を集めたことにしよう。しようというところは意味があるんですよ。実は出したのは3人で出したんですから、私を含めて。しかし、個人で出したとなると、また市が何か言うはずですから。それで、結局その会で集めますからということで市議会を通したわけなんです。ここまで館長が言うからにはみんなで応援したらいいやろと言ってくれてパスしました。そして、議会を通したことによって田川市が窓口になることになります。

ここで、皆さんご存じかと思いますが、MOW・記憶遺産については、唯一、無形文化や有形の自然とか建物と違うのは、個人、NGO、それから、地方の公共団体も出願ができるという規約があるんです。もちろん国がするのが一番良いですよ。2年に1回、2つまで1つの国が推せんできる。そういう内規があるんですね。そこで国に相談しようと思ったら、このときはまだ国が体制ができていませんでしたから、そこでせつかく世界遺産という流れの中でバックアップしてもらってやったらできるかもしれないと言うてくれとるから、できんかもしれんけどやってみようという事の勢いですね。それで、今言ったように議会を通し市長を代表者にして、世界遺産の専門家の委員会、海外に9人おられますが、このうちの一人、オーストラリアのマイケル・ピアソンという先生に代理人をお願いしました。

なぜ、この方をお願いしたかという、皆さんご存じのようにオーストラリアはヨーロッパの流刑地ですから、流刑地の資料を集めて記憶遺産に既に申請して実現された専門家なんですね。だから、その先生が経験があるということで、代理人をお願いして市長と契約を結んでもらって、もちろん最終的には英語で出願しなきゃいかんから、英語圏の人が窓口にいないと、我々では心許ないですから。もちろんそこには東京に加藤康子という女性がおりまして、この人が世界遺産全体のコーディネーターをやっているんですが、この人がとにかく資料を集めるからやったらどうねということで我々の尻を叩いてくれた女傑ですけれども、この方達が英語に訳すのは全部やってくれる。それでピアソンさんに送る。炭坑用語については電話で話して、これはどう訳そうとか、ああだこうだとやり取りをしながらやっとなり上げた。これが間に合ったわけです。

それが2010年の3月31日締切りにピアソン先生が仕上げた76ページにわたる英文の申請書、そ

れから、それに説明資料として添付した 584 枚の図録ほか、いろんなものを持って自らパリの本部まで行ってくれてセーフだったんです。こうして受け付けられた後は審査を待つ。結果は 2011 年の 5 月 25 日のユネスコのインターネットによって、世界中 45 の中の 1 つとして作兵衛の記録画と記録が申請どおりに登録されたというわけですね。それからが大変なことにつながっていくとありますが、とりあえず終わりの時間は 40 分ですかね、持ち時間まで思いっきりがんばります。

そこで、こうしてなって今日までのことを振り返りますと、実はなった後 6 月に下関で我々が属している、今はオブザーバーになっていますが、本体の九州・山口の 6 県 12 市の世界遺産推進協議会の定例総会があります。市長は都合で東京へ行っていましたから、なった直後ですから、私が代わりに、皆さんのバックアップもあっておかげでなりましたという挨拶に行ったんです。その席で会長さんの鹿児島県の知事が、挨拶の中へきちっと田川市がこうして記憶遺産になったと。それから、岡田先生という世界遺産の専門家を代表していろんな報告の中で激励とお祝いの言葉をいただきまして、私もお礼の言葉を言ったんですが、ここで一つ皆さんに報告しておきますと、我々はこの世界遺産の取り組みとリンクしていると思っています。

つまり世界遺産の本体の運動にリンクして、その話から派生していますし、また、そこと連携しなければ、これはできなかった話だ。というのは、そこにおられた人材と色々な情報がやっぱり大いにバックアップしてくれた。それから、私は穿った見方をすると、イギリスにコソン卿という世界遺産の大家がおります。この方は産業遺産を世界遺産にした。それ以外にスチュワート・スミスさんとか、呼び名は日本語で言うともあまり良くないけどギャンブルさんというんですね、こういう人たちがあって、どうもこの人たちがピアソンさんのバックについて、おまえが代表やっとなるから自分達が応援してあげると言うようなことで言うてくれたんやないんかなと思うんですよ。これはありがたいですね。つまり外国の先生方は、なんでこんなに作兵衛さんの記録画に対して熱を入れてくれたのかということは、私は今思うと、今から説明にも入るんですが、このように思います。

こうして、とにかくだめじゃないかなと思いつつ、しかし、こうなったら引かれんということで取り組んでみたらなったでしょう。また、6 月の総会で岡田先生が、世界遺産の中間報告をやっている中で一つ良い言葉があるんですね、これは皆さん方も覚えてください。というのは、三重県にはあるやり方をすれば世界遺産の可能性があるとところがあるなと私は思った、言いませんよ、罪作るから。変に期待をさせたり、煽ったらいかんですからね。今日の朝は勉強してすごいと思ったんですけど、それ以上は言いません。

そこで何かと言いますと、岡田先生は良いことを言われたですよ。「世界という名前をもらったら二つの大きな圧力が来ますよ。一つは環境の圧力です。もう一つは観光の圧力です」こう言われましたね。今、田川市はそのとおりなんです。なぜかと言ったら、なる前も同じものを展示してるんですけど、なった後は世界という名前ですべての皆さんがありがたいくらい来てくれる。入れ物が小さいですよ。というのは、そのために準備した入れ物ではありませんから、私どもの石炭博物館の 2 階に炭坑文化の部屋があったんですね、広さがこの部屋の 3 分の 2 ぐらいかな。これの半分ぐらいは作兵衛さんを実は前から飾っていたわけで、レプリカをですね。あと残りは、三井田川が残してくれた非常に貴重な用具であるとか、炭坑夫からずっと勉強して地方では有名な画家になった先生の絵とか飾ってるわけですね。この部屋をとにかく作兵衛さんの部屋にしようということになって急遽対応しました。

そしたら大変なのが、まず、原画を飾るときには、こんなライトではだめよということから始ま

るんですね。そうしますと、まず電気を変えないかん。外から紫外線が入って来ない衝立を作れとか、ガラスには目張りをして光線避けしろとか、そういう会場の設備にまず問題がある。それから、恥ずかしい話ですが、トイレがだめになったんです。押し寄せてきたら、たった1箇所ある障がい者の人のトイレにずらっと並んでおるんですよ。理由はほかが和式で使えないというんですね。私も女性トイレまで見たことないもんやからびっくりしましたが、そうなる。こらいかん、急いでトイレを洋式にせないかん。

それから、もう一つが、なったら最後、保存をどうするかという問題があるでしょう。まず、保存するためには収納庫は今のままじゃだめだと。まず、中に入っておる、例えば接着剤の臭いがするのもし入れとるんですね、一緒に。そんなの全部出さない。そういうことで特別に作兵衛さんの原画と資料だけを収める部屋はできないけれども、そこにふさわしい環境にするためにどうするか。これはこれ以上言いません、保安の関係がありますから。そこで何千万かの金が必要とか。とにかく市長も大変ですよ、いきなりやれやれとなるもんやから、議会へかけられず市長の決裁で決定した。後で議会から随分文句言われたけども、お陰でそうしてやっと嵐に間に合うようにして開館。9月17日から原画展を登録記念でやったら、それはありがたいですね。ただ、ありがたいけれども、入れ物が小さい、元々小さいし、田川ですから、わざわざ東京やら遠くから来てくれる人もおるんですが、なにせ遠いんですね。したがって、いくら入ると喜んで1日最大2,000人が限度です。これはまだ多くの人に見てもらおうという状況では、仮の間に合わせの場所であるということになりますから、もし田川でもっとたくさんの人にもっと余裕を持って来てもらうならば、駐車場も十分そろってる。飯食うところもある。お土産屋もあるというようなことにしなきゃだめだよということになったら、相当な時間にかかるし、そういう支出行為も要りますが、冒頭言いました田川市でできるのかという問題があるんですね。したがって、財政破綻との天秤にかけながら、これから世界に向かってどうする。

そこで、嘆いてばかりおれませんから、専門家の知恵も借らないかんということで、文化庁のほうからも、あるいは国立博物館のほうからも、大学のほうからもたくさんの専門家来ていただきまして、私も入って30人の委員会を作ってようやく議論が始まって、まず、保存、活用、記念行事、周辺の環境整備、そういうような分科会を作って、今検討が始まったばかりなんです。だから、そういう中で作兵衛さんのお陰で地域は眠りかけたのが目を覚まされてしまったということですね。

私は昭和42年、27歳のときに一回出版と叙勲の祝賀会であったとき、作兵衛さんが75歳で随分年の差があります。作兵衛さんは非常におもしろい展開をするんですが、簡単に作兵衛さんのその部分だけ言いますと、昭和38年に初めて本が出版されます。この本は誰が出したかというと、炭坑の経営者たちが出したんですね。当時、九大の学長さんを辞めてすぐの山田穰さんという、鉱業関係の専門家がおられました。その人を編集委員長に据えて、墨絵の本を昭和38年に出しました。これが最初です。

そのいきさつは、作兵衛さんが長いこと炭坑で働いておって、働いていた炭坑が閉山になります。閉山というのはお分かりですね。そして、終わった後、その炭坑が元々遠い親戚だと彼言ってますが、本当は義理のお兄さんの炭坑なんですけども、その炭坑の今度は泥棒除けの夜警に入るわけですね。夜警に入ればしばらく経ったら、手持ちぶさたもあるし、6人の子どもの中で唯一戦争で戦死した長男さんがおられまして、この人のことが思い出されるということで絵を描き始める。夜中に長男のことを考えるから絵のほうにいきこうということで、それが始まりだと言われてますが、年代で言えば昭和33年からスケッチブックに墨で描き始めます。それがたまりにたまって20冊にな

ったところで、炭坑の経営者たちが目に止めて、自分たちも炭坑のプロだけれども、自分たちの知らないような話を彼は描いてくれている。これはそのまま世に埋めたらもったいないということで、本にしてあげようということで出版したのが昭和 38 年です。

ところが、昭和 38 年の墨絵の本を出すという話を聞いて、ここからが作兵衛さんにとっても我々にとっても運命の展開で、今振り返ると、いろんな人がそのときそのときで何らかの役割を果たしているんですね。今日まで保存と価値を保持し続けたというか、それが世界記憶遺産になったということになりますから、作兵衛さんが残したものを多くの人がやっぱり担いで守ったということでしょうね。

その第一号の人が、永末十四雄という名前を皆さんに今お知らせします。我々田川市の図書館長さんで、郷土史の研究家で、ちょうど私も今はその会長をさせられています、田川郷土研究会というのを立ち上げたばかりで、目的は、炭坑がどんどんつぶれていって資・史料が無くなっていくと。この資料を集めないかんという運動を始めたばかりのところに、作兵衛さんの墨の絵を聞いて飛んでいったわけですね。そして、この墨の絵に色を付けてください。皆さんは本日の会場の掲示板でコピーを見られたでしょう。ああいう色を付けることをお願いしたけど、作兵衛さんは炭坑は色がない、実は色を付けるということは、本当は本物じゃなくなるんですよ。墨絵でも本物じゃない。なぜかと言ったら、これは皆さん博物館に来てもらって、実際の採炭現場の写真を見てもらうといいけど、みんな炭坑から地上に上がってきたら顔が真っ黒けで見えませんか、石炭の粉で真っ黒になってるわけです。目の周りだけが普通の顔で、後は真っ黒です。だから、すぐ風呂に入ってすべて洗い落としてやっと普通の顔に戻る。したがって、それを作兵衛さんは墨で描くことで一応普通の顔で描いている。それへ色をつけると言うんだから相当無理な話なんですけど、これはそれを粘って説得して、じゃ、みんなが分かりやすいということだったら色をつけましょうということで、あの絵になっていくんですね。そういう意味で最初に墨で描かれた絵は約 300 枚になるんです。それをほんの一部、140 枚が本になってるわけですが、その次に、今度は色を付ける話になっていって、色の付いたものを次々と田川市の図書館に持ち込んでくれる。そうしているうちに、今、私が館長をしている博物館と言いますが、当時は資料館というものをつくったんですね。その資料館をつくる時に作兵衛さんも建設委員に入ってくれるんです。永末十四雄という人も入っている。だから、一緒に入っているから話は分かるでしょう。描いた絵はみんなそこに集められる。したがって、図書館にあった絵も資料館に移す。さらに作兵衛さんは資料を書いてくれる。したがって、約 300 枚ぐらいの初期の彩色の絵が集まったんですね。これが 1 つ。

そして、ご本人が亡くなった後に、また墨のものを今度はあるところに、あるところというより上野英信という名前を出したほうがいいですね。この人も作兵衛さんの絵を非常に高く評価して描くように勧め、本屋さんに持ち込んで本にするのでは随分活躍した人ですが、その方のところに貸していた墨絵が、遺言によって山本家（作兵衛さんの実）に戻されて、それがまた博物館の前身の資料館に。ここで塊ができたわけです。どういう塊かということ、作兵衛さんの最初に描いた墨の絵のほとんど全部。全部とは言いませんよ、というのは最近 1 冊出てきましたから、17 枚綴ってあるスケッチブック 1 冊、今、地元の中村美術館というところに私借りて飾ってますが、貴重なものが 1 冊。だけど今、墨絵の 306 枚うちがもらってます。それにその次に初期に描いた色つきの絵（彩色画）が 278 枚、これぐらい固まって所蔵しています。

これはどういう意味があるか。作兵衛さんが自分の孫や子どもたち、あるいは将来の後輩たちが炭坑が分からんようになったときに、伝えならんという思いで一所懸命描いてくれた初期の絵で

すから。その後、有名になったときに作兵衛さんは頼まれてすぐ描いてあげます。そういうふうに描いたときは、前の絵を大体再現していくわけです。ぴったり同じ絵というのものもありますが、少し違うものもありますけど、大体人にあげた後、自分とこに残しとかなって、同じ絵をほぼ描いて手元におくわけです。またもらいに来てまた出すから、また描くという話で、私が持っている 1974 年の絵は、73 年にも同じ絵があります。後にもまだある。それから、本日の掲示に狐の並んでいる絵ありましたね。ああいうのはうちに 1 枚あるんですけど、それ以外で 3 枚見えています。

それから、風呂のあるシーンがありました。風呂のあるシーンはみんな違うんですよ。人の向きが違ったり、風呂水の色が違ったり、場面がひっくり返ったり、作兵衛さんは同じ絵は描かんとやったんですけども、確かに違う。そういう違いもありますが、大体同じような絵を残していくのが彼の習性だったようです。それを追加、追加してもらうものだから、また描くと。約 2,000 枚は描いたのではないかなってますが。現在、県立大と共同で調査して、未発見のものを次々とデータ化してますが、今の段階で正式には 1,038 枚まで。これは大体 5 月の段階ですね。その後、私のほうに寄贈していただいたのが 23 枚、県立大がいろんな形で手に入れたのが 10 枚、それ以外にここに何枚、あそこに何枚ということで出てきておりますから、まだまだこれから確認できるでしょうが、ただ、描いたものが全部残っているとは限りません。有名になったから急に探したけど無かったという人が多いですね。どっか放たりこんだ、田川弁ですけど分かりますかね。捨てたような状態で置いてって、慌てて探す。あつたとかいって出てきますが、カビだらけとかそういうことになりますので、なかなか良い形で残っているのがどれだけあるかについては、確認にまだ時間がかかりますが、要はそういうことに今なってる段階ですね。

そこで、時間の関係で中身に入る前にそこだけまとめますと、結局どういうことなのかといったら、我々は世界遺産運動とリンクしながら、普通の関連資産になったときにいきなり言われて、そんならもうことの勢いだからやってみようかやってみたら、なってしまったということでしょう。つまり、これは他の用意周到で調査研究が十分し尽くして、これなら大丈夫といって申請されるのとちょっと逆になっているわけですね。したがって、そのことは別にしても、うちの場合は今から作兵衛さんの人物像とか、書き残した日記とかノート類から、彼が本当に何を伝えようとしたのか、どんな生き方をしようとして何を考えたのか、こういうこともきちっと皆さんに報告できるように責任を持って研究しなきゃいかんということが出てきます。

それから、残された絵の確認と内容の整理、もう 1 つが、実は日記がたくさん残されています。彼は非常に筆まめで、小さな手帳などにも日記を書いています。私のところには 6 冊、県立大に 59 冊残っていますけど。その復刻を県立大が「読む会」を 10 年間してくれてますが、この内容を詳細に分析することが必要。特に誰々から頼まれて何というテーマの絵を描いてあげたとかちゃんと書いてますから。実際に書いたのが何枚あって、今何枚残っているか。例えば、手元に 1 枚描いた絵がありますが、その日記を見ると、5 枚お父さんがもらってるのが 1 枚しか残っていない、その家が。あと 4 枚は分かりませんという子どもさんもおるんですね。そういう中で描いた絵の内容と現存するものの確認と、さらに私ども世界の記憶遺産に登録されたものの日記や絵の保存の研究も必要ですが、それ以外の残された多くの絵をいかにして貴重なものとして保存してもらうのか。そして、それを場合によっては世界の記憶遺産につなぐことができる可能性があるのか、そういうことも一緒に考えたらん問題がありますね。

では、なぜ、世界記憶遺産になったんだろうかということですね。そこで私もどういうふうに考えたらいいかと思ったんですが、とりあえずは皆さん方に分かりやすいものとして、6 ページ（記

録集 48 ページ) を開けてください。6 ページ (記録集 48 ページ) にあるプリント、山本作兵衛炭坑画という 1 枚ものがあります。それが、今、石炭・歴史博物館においでいただいた皆さんに会場で持ち帰ってもらうための資料です。その一番上に何点が登録されたのか、点数ですね。それから、大まかな「世界記憶遺産とは何か」から、経緯といろいろ書いてますが、山本作兵衛選定理由と評価のポイント、大体ここの文章でいいと思いますから、これは後で読んでいただくことにして、皆さん方にもうちょっと詳しいものと思って、その後に今度の特別展のためのリーフレットを作りました。これが綴じ込んであると思います。このリーフレットを綴じ込んだ意味は 2 つあります。1 つは、向こうの複写した絵も見えていただきますが、せっかくだからお土産になるだろうということで、裏まで入れましたら 11 枚の絵を印刷していますから、こんなリーフレットは珍しいですが、わざとこうしたんです。絵はがきは一々持って来て買ってくれというわけにはいきませんから、したがって、代表的な作兵衛さんの訴えたものとか、あるいは残したもので、私たちが非常に貴重なものと思うものを一応リーフレットに散りばめました。それで、これはこれで資料としても見ていただくいいのですが、その裏のほうの山本作兵衛コレクション展という作兵衛さんの写真が載っているところですね、これを開けてください。

ここで一番ユネスコで重視されたと思われる内容をまず先にご紹介したうえで後いきますと、山本作兵衛さんの写真、この写真が昭和 40 年の写真で 73 歳の顔です。作兵衛さんが初めて個展をやったのが、この年の 10 月ですが、人があまり行かなかったということですね。そのときに、作兵衛さんを紹介する写真を写していたわけですが、これはひざ下まであつて手もあります。半分だけというのは申し訳ないですが、一番最初の公式写真と思ってください。73 歳。この写真を写したのが、今は健在ですが橋本正勝というプロのカメラマンが撮りましたね。この方が写してこの写真を持ち込んだら、作兵衛さんが非常に喜んで、あんただけ内緒よと 6 枚くれたんですよ。彼はこのごろ見せてくれたらものすごくいいんです、それが。それでも作兵衛さんは黙ってくれたんです。だから、色がすばらしい、初期のもので、誰も見せてないから。これが作兵衛さんの最初の写真ですが、この写真の前のほうで、「共有する記憶として社会的に高い評価」というのがあります。これがまず第一のポイントです。共有する、いわゆる記憶として世界的に高い評価。

私は英語に非常に弱い人間ですが、スプリングーさんという人がユネスコの事務局長さんの秘書役で、実質取り仕切っている女性がおります、南米出身の方ですが。NHK の全国版というんですか、五木寛之さんが出た「クローズアップ現代」がありますね。それから、もう一つ九州地区で「特報フロンティア」という番組があったんですが、あの中で最初に出てくるユネスコの委員会の事務局で女性の方が出て、我々が送ったこの図録の冊子と、もう一つ報告書の 2 冊を手にして満場一致でみんなが認めましたという女性がおりますが、このスプリングーさんが言った横文字が、まず一番すばらしいのが、「コレクティブメモリーですから」、こう言ったんですね。私は一所懸命まず平仮名で書いて辞書を引きました。コレクティブが「共有する」ということなんですね。共有する記憶ということなんです。我々は作兵衛さんを日本人の目で見ているでしょう、世界の目で見てない。ところが南米の人とか、アフリカの国とか、ヨーロッパの人たち世界の目から見たら、共有する記憶になぜなったかと言ったら、同じような状態が各地にあったわけですよ。例えば、女性労働で作兵衛さんの絵にあるように、女性が一所懸命になって引っぱったり押したりしてますね、あの姿はイギリスにもかつてあったわけですね。それが記録に残っているわけです。南米にもある、東南アジアにもあるわけですよ。したがって、作兵衛さんが描いたことは、本人はそのつもり無いかしらんけど、世界中どこにもあった姿である。それがきちっと残されていることが一つ。これが

コレクティブ・メモリー、これが第一の特徴です。

次が、今度は文章から言ったら、その4行前、「山本作兵衛氏は、炭坑記録画や日記等によって詳細に記録しています。一個人の視点によるこれらの記録、個人の記憶にとどまらない社会集団の記憶を具現化したものであり」、さっきのプリントのほうに戻ってください。6ページ（記録集48ページ）に、作兵衛画選定理由と評価ポイント、コレクティブメモリーのほうはあんまりここに出てませんが、少し読んでみます。「山本作兵衛の作品群は、産業革命に直面していた筑豊の炭坑で実際に働いていた一鉱夫の体験に基づくものである。」まず、ここに一つ、産業革命時期の筑豊の姿をよく書いていることですね、これが大事なことです。この産業革命の中身は、イギリスから始まった産業革命のずっと影響を受けて、日本でこれが近代化のための産業革命になったわけですね。これは世界の流れとしては、イギリス人が世界遺産をリードしているんですが、中身見たらよくやっとなるということになるわけですね。日本ではこうなるとるやないかということの評価になるわけです。これが一つ。

それから、それを一坑夫の体験に基づいていて、世界史にとって重要な時代の記録としては非常にまれな、「政府や企業が残した公のものでない」、つまり強い側、勝った側のものではなくて、全く個人的な記録である。これが非常に高く評価されたんですね。私は後で説明聞いて、あっそうですかということになったんですが、イギリスに非常に有名な画家がおられて、この方が炭坑の絵をたくさん残しているそうです。その画家が良いとか悪いではなく、その画家を例にとってイギリスの人は私に言ったんですよ。イギリスのローリーという画家はすばらしい記録を残してくれたけど、彼はそこで働いたことがない。作兵衛という人はそこで働いているじゃないか。だから、自分の体験と仲間のことをしっかり押さえてその目で描いている。これはやっぱり私たち言われたら、そうだなと思うんですね。作兵衛さんの目線というのは一般庶民ですから、一般庶民の姿をたくさん描いているわけです。だから、そういうことが一つ。

そして、当時の風習や生活も記録されている。先のピアソンさんが6月18日に加藤康子さんと一緒に田川に来ました。世界遺産調査で来たついでに寄ってくれたんですが。新聞記者やらテレビ局が取り囲んだとき、うちはずっと展覧会やっとなるでしょう。その展示の前で質問があったんです。あなたはどういう場面が作兵衛さんの中で大事だと思いましたかという質問。日本語で言うと加藤さんは英語に訳して伝えるわけですね。そしたら、ニヤッと笑って示したのはなんだと思いますか。今日は持って来てませんが、鉱夫たちがご飯食べている場面があって、ご飯に味噌汁をかけているんですよ。そしたら、頭をゴツンとやられている場面ですね。こういう場面がすばらしいと言んです。なぜかしたら、普通、そんなのは絵に残らないです。なぜ味噌汁かけてゴツンとやられたか分かりますか。味噌を付けるといって縁起が悪いというんですね。炭坑で働く人はとにかく縁起、安全とか縁起にこだわってますから。

例えば一つの例ですが、サッポロビールには2m高い日本で一番高いレンガ造りの煙突がありますが、私のところに2番目に高いのが2本あります。45.45mのレンガ造りね。朝、それにカラスが止まっていたら、今日はカラスが止まるとから事故かもしれないと、休むんですからね。それぐらいに坑内というものの危険性をみんな熟知しているだけに、ちょっとした不安とか不吉なことがあったら大変なことになる。それが味噌汁かけただけでもゴツンとやる。それにピアソンさんがニヤッと笑って、こんなのはすばらしいと言いましたね。我々はあれは当たり前と思うとるけど、つまり見る角度によって評価が出てくるというのはありがたいですね。

したがって日本人だけの専門家の先生に見てもらったとったら、専門家の先生がいいとかじゃなく

て、その目で見たら我々と同じだから、多分もう申請してもだめですよぐらいで終わったかもしれない。つまりヨーロッパの先生やオーストラリアの先生は、すごい絵だから出せと言うんですね。あれほど言うなら出してみようかが当たったわけですけども。そういうことになるわけです。したがって、作兵衛さんが評価されたのは、こういうことにあるということですね。皆さんに今知ってもらう。特にその中で、この資料にはない、コレクティブ・メモリーというところですね、これがやっぱり我々は気がつきません。外国のたくさんそういうものを知ってる人の目でないと出てこないですね。世界各地で同じように地面の中を這って人々が労働している、そういうことであります。

あと、5分になりましたから、そこで、これから先の展開として一つ考えなきゃならんのは、結果としてこうなったときに二つの圧力、これは地元の皆さんもしっかり覚えとって、世界遺産を目指すときには、その地区体制も総力入れてがんばってください。

今回の新しい博物館構想というのがうらやましいぐらいすばらしいですね。それはみんなでつくる博物館というのが原点に入ってるでしょう。偉い人ばかり専門家が、建築とかなんやとかつくってある中に、もう県民ぐるみ、市民ぐるみでみんなで新しい大事な博物館をつくろうなんて、まさにこれはすごいことをやられるというので尊敬に値すると思いますが。できあがったら、ぜひ見せてもらいに来ようと思います。

我々の場合はどうなるのかと言ったら、さっきも言いましたが、急づくりですから、臨時の入れ物、臨時のお迎えの仕方、しかし、それでもお客さんたくさん来てくれるわけですから、この方々にやっぱり自分らが感謝の気持ちでお迎えできるのか。そうしなくても、来た人は嫌事いっぱい言いますからね。何かといたら、炭坑節を流せとか、お土産屋が少ないとか、周りに食堂がないとか、こっちが言われたら困ることばかり言うて帰るんですよ。

それから、一番困ったのが、私は良かったと思うんだけど、今日は持って来てません。登録している589枚のうちの584枚を図録で見せてる。これは山本家から私が館長になってすぐ言われたのは、山本家の三男の照雄さんという方がおりまして、この人とお孫さんの2人が私のところへ来て、館長と言いい大体絵を584枚も持ってどうするつもりですか。大事にしますよ。なおしとるだけですから、大事にしとる。何か、分かった。私も館長になって全部見たことないですから、そんなら全部いっぺん出そうやないかということで、思い切ってうちの博物館と、田川市は小さい施設ですけど美術館を持てますから、田川市の美術館両方を使って全面公開展覧会をやったんです。ただ、いっぺんでできません。2回に分けました。そのときに、これを1冊、全部展覧をしたものを図録にしたんですね。これが今売れに売れています。増刷増刷です。

ところが怒られるんです。この前、兵庫から電話がかかりました。持って帰って字を読もうと思ったら、小さすぎて字が見えん。どうしてくれるというけど、どうしてくれるというのもない。なんとか拡大してみてください。こうやってみてもやっぱり見えない。レプリカで掲示している物のように大きくすると見えますけどね。しかし、あんな大きさにしたら、何十万円かかるか分かりません。そんなことできませんから、とりあえずそういう苦情がたくさん来るということはありがたいことでしょう。関心を持っていただいとるということですからね。そこを大事にして、じゃ、今度はその人たちに応えられるようにしようやないかということで今進んでいます、限られた予算と人間ですから、なにせ、世界になって7人の人を配置してもらいました。もちろんこれは臨時で雇う人ですけど、受付とか会場の案内・監視、とにかく写真撮って帰る人がおるんですよ、黙って。そして、悪いとは知りながらといってインターネットで流す人がおるんです。こんないたずら超えたような犯罪をされたら、たまったもんじゃないですね。

したがって、後ろの展示も自分のとこの参考までに言うんですけど、また他所に勝手に流したらだめですよ。インターネット時代怖いのは、1箇所でオッケーするでしょう。それが全部全国で走るんです。米騒動で赤丸が入った画面、あれは全国で今ありますからね。私とこへ持って来て、これ印刷に使うけどいいやろか。どこで手に入れましたか。インターネットに出とるから。そら困るんばい。なぜ困るか、著作権という問題があります。

あと22年あるんですね。作兵衛さんが亡くなってこの12月19日で28年になりますから。この前、遺族の方と変な話で大笑いしたんですが、お互い、後22年がんばらんといかん。なぜかといったら、著作権というのはどんなことがあっても、本人の家系の継承者にしか権利がない。したがって、山本家の誰が著作権があるかも調べましたが、それを守るのも大変なんですね。だから私も逆に自分がある論文に書いたときは、山本家も入って話しあい我々で1枚3,000円と決めたんですから、おれも3,000円払うぞ。おれやからただにせいと言いません。それは何か。みんなに守ってもらいたいから。それくらい大事にすることで、もっと中身を広げにやならんと。その活用と保存、そして、そういういろんなものを守っていくことが今からの私たちの仕事ですが、どうか今日おみえの皆さんも関心を持って見ていただきたいと思います。

終わります。どうもありがとうございました。

進行：

安蘇先生、ありがとうございました。皆様、もう一度拍手をお願いいたします。

ここで休憩に入らせていただきます。今から14時40分まで休憩とさせていただきます。よろしくをお願いいたします。

3 問題提起

「地域の価値を明日に伝える」

菅原 洋一 さん（三重大学大学院工学研究科建築学専攻教授）



進行：

それでは、時間になりましたので問題提起に入らせていただきます。

講師は、三重大学大学院工学研究科の教授、菅原洋一先生にお願いいたします。先生からは、地域の価値を明日に伝えるというテーマで問題提起をしていただきます。

それでは、菅原先生よろしくお願いします。

＜問題提起で使用了関係資料は記録集 P. 53 に掲載＞

菅原：

こんにちは、菅原でございます。

今、安蘇先生から大変に迫力のあるお話を伺いました。もう 10 分ぐらい長く聞きたかったんですが、そういうお話の後で、ちょっと私の話は元に戻るように思えてしまうかもしれませんが、よろしくお願いします。

今日のシンポジウム、三重の近代史から地域の明日を探るというテーマです。今、安蘇先生から、まさに筑豊の近代になってつくられてきたいろいろなものをどのようにして資料にして守って、そして生かしていくのかというお話を伺ったわけですが、まず、今日の全体のシンポジウムの前提として、近代とは一体何だということからお話を始めたいと思うんです。

三重県にはいろいろ市があるわけですが、この市はほとんど城下町として、あるいは四日市のような街道や港の町もございしますが、いずれにしても江戸時代が始まるという時期にできた町なんですね。それが、今私たちが暮らしている四日市なり津なり、といった町の直接の母体になる。我々の生活は、近世になって建設された都市であるとか、産業であるとか、文化、そういうのが母体になっています。なおかつ、それが近代化の中で変容してきた。そういったものの中に我々が生きているということです。ですから、近代というのは、ずっと遙か彼方、昔の時代ということではなくて、我々の直接の出自にかかわる時代だというふうに考えなきゃいけないということでございます。

一方で、この近代、すごく忙しい時代だと思います。それより前の時期と何が違うか。基本には、開国という非常に分かりやすい政治的な区分があるわけですが、世界的に見ますと産業革命が起こる。それによって非常に大きな資本の蓄積の下でいろいろと産業化が進んでいくという時代になるんですね。非常に忙しい時代になっていったということだと思います。

そういう産業革命の下でいろいろ世の中が変わっていくわけですが、そうしますと、その変容といますのは、一地域だけの問題でもなく、国内だけの問題でもなく、世界のいろんな動きと連動していく展開になるということなんです。ですから、近代の時代については、地域を考えるとということも、それは同時に世界の動きとの関係の中で見ていくという見方が必要になってくると思います。

そういう中で、技術や産業が盛衰をする。あるいは人のいろんな流動が出てくるということがございます。問題はそういうふうにして非常に世の中の変化が激しくなっていく。産業で言えば、ある産業が違う産業に変わっていく、あるいは、その産業を支えている技術そのものが変わっていくということで、今まで使っていたような施設であるとか、装置であるとかがどんどん更新されていく。土地利用が変わるというなことで、我々の直接の生きてきた時代である近代というものの痕跡がどんどん断片化されていく、細切れになっていく。あるいは、そのときに直接仕事をしたことが、

山本作兵衛が炭坑で仕事をしている　そういう当事者でなければ知り得ない記憶がどんどん消滅していくということだろうと。

それが、それ以前の時期、例えば近世ですとか古代中世とは根本的に違う、そういう時代であるということです。明治、大正、昭和と続く近代のものを今の目から見ると、稚拙だったり、みすばらしかったり、あるいは、いろんな間違いもしてきた、そういう時代だったとは思いますが、間違いなく我々はそこで育ったということです。

今日は博物館のシンポジウムですが、博物館が社会的な機能として必要とされて定着していったのも近代のことです。ということで、近代と博物館のつながりを確認をしたいと思います。まず、江戸時代から明治への転換期に非常に価値観の転換があったわけです。例えば廃仏毀釈ですとか、三重で言いますと、神宮の改革とか、廃藩置県といったことになります。その中で今まで当たり前のようであったものが、無用のもの、不要のものになっていく。ほったらかしになるのはいいほうで、放棄される、あるいは、積極的に破壊をされるというふうな事態に立ち入ったわけです。典型的にはお城のようなものですね。そういったことがあって、ともかく旧物をどんどん失っていく時代があるわけです。

そのうち、そういったものを保存していく、古器旧物を保存するといった見直しが出てきます。法律で言いますと、古社寺保存法ですとか、昭和になってからは国宝保存法、史跡名勝天然記念物保存法といったものが整備されていく。そうして古いものを保存していくというのが、博物館の一つの流れ、ルーツになります。

ところで、博物館のもう一つのルーツがあります。それは勧業、殖産興業、新しい産業を興すための博物館ということです。それは博物館という建物ができる以前に、共進会、博覧会といったイベント型の形で、その都市が持っている物産や技術を展示する。産業を興すにあたっての参考にするということがされます。それが恒久化したのが博物館です。

そうしますと、産業を興すということは、役に立つものをまず探すということが大事になってきます。そのために何が使えるんだろうとかいうことをいわば発掘する、評価するということが行われます。ですから、初期の博物館関係者は、三重県で言いますと、勧業課という課があって、その

課に関わっている人たちであるということが各地であったのです。

ということで、博物館は元々の成立を見ていきますと、地域を興していく、産業を興していく、そのためのヒントを提供する役割を持つと思います。九州・山口の場合は、石炭あるいは製鉄というものを軸にして近代化が進んでいくわけですが、三重県での文明開化のきっかけは灯台です。産業的に特に重要な地域ということではなく、軍事的にも特に重要な地域ということでも三重県はなかったわけですが、まずは諸外国との交易のための航路の整備をする、そのための灯台を菅島、安乗に設置する。これが三重県の文明開化のきっかけになります。

その後県内各地域の中での近代化が起こるわけですが、四日市の場合は非常に水に恵まれた豊かな農村地域を持っている。そういったところで味噌だとか醤油だとか清酒の醸造のような農村産業がまず起きる。それを基にして製糸、あるいは紡績のようなより近代的な産業に移っていくということがございます。

それから、ある産業がほかの産業にかかわり合っていくということがございます。例えば、四日市の萬古ですが、これは実は桑名の鋳物業ともかなりかかわっていて、萬古焼きの粘土の採掘の中間層でいい砂が採れる。それが桑名の鋳物の生型に使われるということで、明治以降、桑名の鋳物業が発達をしていくのも、萬古と連動した動きなんです。このようにある地域で一つの産業が興る。それはその産業だけで留まるわけではなく、ほかの産業と連関していくことがおもしろいところだと思います。

そうして、近代の中でいろんな動きが出てくるわけですが、問題は今そういった近代になっているろいろ工夫されて作られてきたものが、今どうなってるのかということです。現状としては、こういったものが捨てられている、あるいは、あっても放置されている、埋没している、あるいは消費されているというのが現状だろうと思います。

四日市は三重県の中で一番近代産業化が進んだところですが、そこにしてもそういった四日市の近代の歩みを伝えるものがどれだけきちんと残っているかという、やはり心許ない状況であります。そういった、ものがどんどん失われていく。

それから、もう一つは近代の記憶ですね。当事者が直接知っている、その当事者が伝えない限り、後には伝えられないような記憶がほとんど消えていってることがあります。こういったものを考えていくことが、これから後、大きなテーマになると思っております。今、そういった放っておけば消えてしまう、あるいはゴミになってしまうものを放っておいていいのだろうかということになります。それを資源として、これからの地域をつくっていくための新しい手段として次の世代に引き継いでいく、あるいは、我々がそれをきちんと評価して使っていくということをしなければいけない。

そのためには、埋もれてるものを発掘する。それをきちんとした分析なり評価をする、整理して保存する、あるいは活用してという一連のプロセスが必要だろうと思います。そのとき、埋もれているものを使えるものにしていくという素地になるのは博物館だと思っているんです。

一方で、埋もれているものを発掘して使えるようにするというのは、博物館が自己完結的にやればいいかという、そうではないんです。なぜなら、埋もれているものについて一番よく知っている人は、実は博物館ではなくて、地域の中に、あるいは企業の中にいるということです。ですから、埋もれてるものを発掘してきちんとした評価をするのは、博物館だけの仕事ではなくて、地域のいろんな主体と、個人であったり、企業であったり、組合であったり、学校であったり、いろんなところと一緒にやっていかなければ、実はそういったものをこれから本当に使っていける形に再転

換することはできないと思います。それが例えば古い時代、古代や中世や近世のものとは非常に扱いとして違うところであると考えます。

ということで、私思いますに、地域の中に埋もれてるものを使えるようにしていく、実際に使っていくプロセスの中の中核には博物館がなければいけません。ただ、博物館だけがあればいいということではなくて、近代のものを本当に資源として生かして新しい価値を作っていくためには、みんなで作る、あるいは、みんなが参加していくという形が欠かせないと思っております。博物館はそのためにはいろんな人に刺激を与える、いろんな人を触発する。引きつけて、博物館に来るとこういうことができる、こういった情報が得られる、材料が得られるというふうな存在であってほしいと思います。三重で今、新しい博物館をつくらうとしているわけですが、新しくつくる博物館がこういったみんなでつくっていくと。新しい価値を見出そうということが必要なんではないかと感じています。

今日はこの後、3人のパネラーの方にご登壇いただいて、その後、安蘇先生も含めて意見交換をしていくわけですが、3人の講師の方々は、実際に地域の中で、現場の中で埋もれているものを発掘して評価、あるいは使っていくというようなお仕事をされてる方々です。その方々のご意見、ご報告をいただいたうえで、改めてこれからの地域をつくっていくために大事にしなければいけないものは何だろうか考えていければと思っております。

私の話はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

進行：

菅原先生ありがとうございました。

引き続き、事例報告に入りたいと思います。事例報告の準備をいたしますのでしばらくお待ちください。

4 事例報告

進行：

それでは、準備ができましたので、事例報告に入っていきます。1つ目の事例は、「三重の近代史から地域の資産を考える 明治期の博覧会文書から」というテーマで、三重県史編さん専門員、三重大学附属図書館研究開発室客員教授の吉村利男さんをお願いいたします。

それでは、吉村先生お願いします。

事例報告 1

「三重の近代史から地域の資産を考える～明治期の博覧会文書から～」

吉村 利男 さん（三重県史編さん専門員、三重大学附属図書館研究開発室客員教授）



＜事例報告 1 で使用した関係資料は記録集 P. 54～P. 55 に掲載＞

吉村：

吉村と申します。三重県史の編さんに 30 年近く携わっております。

特に今日、菅原先生の問題提議を受けまして、近代史から地域の資源を考えるということでお話しします。ただ、近代史は非常に幅広くありますので、先ほど菅原先生のおっしゃった博覧会関係の関係文書から、特に県庁に残された博覧会関係資料を中心にするということでご理解いただきます。

明治期、県庁文書の博覧会関係文書ですが、三重県行政文書、三重県の明治期の文書が昨年県の指定文化財になりまして、1 万 1,643 点ございます。そのうち、博覧会の関係資料は、約 130 点の簿冊があります。わずかじゃないかとおっしゃいますが、博覧会関係資料の簿冊の厚さはかなり厚いもの、10 センチ以上になるものもあります。まず、どんな博覧会があったかといいますと、内国勸業博覧会が第 1 回から第 5 回まで。ただ、残念なことに県庁には第 4 回・第 5 回の関係文書はございません。

それから、明治 11 年には県内の物産博覧会が初めて津の諧楽公園で開かれました。県内の物産博

覧会の資料のほか、全国の水産博覧会もあります。ご存知のように、『三重県水産図解』という非常にきれいな絵、図解がありますが、それが特別賞をいただいた明治16年の水産博覧会です。それに、31年の第2回水産博覧会関係資料があります。そのほか、伊勢茶として有名な製茶共進会や山林共進会、東海4県での連合共進会があげられます。また、明治40年には、三重県の近代で一大イベントだと思われる第9回関西連合府県共進会というのがありますが、これは県庁文書としてはあまり残っていません。事業団体が別にあつたのです。

なお、国内だけの博覧会だけではなくて、明治11年のパリの万国博覧会の関係文書もございます。パリの万国博覧会では、県内から20人ほどの出品者がありますが、大半が萬古焼きです。萬古焼きを海外に売り出すために河村又助であるとか堀友直、森有節、それに山中忠左衛門とか、そういう人たちが萬古焼きを万博に出しています。ほかに、生糸であるとか壺屋紙だとか製茶がありました。そのパリ万博の受賞者の資料（スライド3）です。県庁に残っています受賞者資料の一部を写したものです。ちょっと見にくいので翻刻しますと、三重郡浜一色町、谷スミというのが萬古焼きで銅牌及び賞状。次が後でお話しをさせていただきます三重郡室山町の伊藤小左衛門の生糸。それから、飯野郡稲木、現在の松阪市ですが、池部清兵衛（壺屋清兵衛）、壺屋紙という紙、これはご存知のようにタバコのキセルとか、タバコ入れを作った擬革紙、皮のような紙でした。この「壺屋紙」は『広辞苑』に載っています。『広辞苑』にある数少ない三重県の言葉です。その壺屋紙を出して表彰されています。それから、三重郡八幡町の高木閑斎、萬古焼きです。それから、もう一つ、朝明郡小向村、森与五左衛門、これが森有節です。ご存知のように、森有節は萬古焼きを再興した人で、作品は「有節萬古」などといわれています。

最初、沼波弄山が萬古焼きを開いたのが小向の谷で、有節もそこに窯を開いています。明治14年の第2回内国勸業博覧会にも小向村、森有節ということで出品しています（スライド4左）。小向は現在の朝日町なのですが、そこに森有節の窯がありました。そして、14年の勸業博覧会に出品をした後、15年に亡くなります。そして、そこに3代目の有節が墓碑をつくります。この墓碑（スライド4右）は公園の中に移設されたものなのですが、実はもう少し西の高いところにあつたのです。ここに区画整理事業が行われることになりまして、朝日町教育委員会の方で発掘調査をしたら、有節期の萬古焼きの窯跡が見つかりました。この写真（スライド5左）は、朝日町教育委員会から提供を受けました。

それと同時に、沼波弄山が開いた古萬古の窯跡の発見もあり、保存の協議がいろいろなされたのですが、実際には保存されずに標柱が立っております。そして、先ほどの墓碑があつた公園隣の名谷B遺跡の再確認調査で、同じ有節萬古焼きの遺構が見られたので、そこは発掘調査をせずに、今後のために残すということで平成18年に県の史跡になりました。ただ、現状はこういった山です（スライド5右）。こういうふうに博覧会資料と現地が結びついた、そういった事例の一つとして紹介をしたいと思います。また、この発掘調査の結果検討にも第2回の勸業博覧会資料が非常に参考になったということがあります。

2つ目にご紹介申し上げたいのは、四日市の伊藤小左衛門ですが、四郷郷土歴史研究会、地域の人たちがやられている活動を取り上げました。

まず、赤で「室山味噌」と書きましたが（スライド6）、これも『広辞苑』に出ているのです。「四日市の室山町で造った味噌」と書いてあります。それは伊藤小左衛門という人が、味噌醤油業をやっておられたからで、今は「ヤマコ醤油」とかいわれるのですが、そのうち、5世小左衛門が製茶とか生糸への取組を始めました。博覧会についても、先ほどのパリ博覧会に出品していますし、内国

勸業博覧会などいろいろ多数出しているのです。こういった資料が県庁の公文書の中に残されています。

下の写真（スライド 6）は、製糸場が発展して明治 36 年に造った伊藤製糸場の建物です。後に亀山製糸場の室山工場になり、今はこの前の棟だけが残って後側はもう既になくなっています。写真は昭和 62 年に撮影したものであります。

それで、地域の研究ということですが（スライド 7）、小左衛門につきましては、田中増治郎さんが『萬里の糸』というのを執筆されています。平成 9 年の発行です。そして、現在、四郷郷土資料館、これは伊藤伝七が寄贈した役場の跡を使っているものですが、その郷土歴史研究会が 5 世小左衛門さんに焦点を当ててビデオを現在作成しており、いろんなところを調査されています。富岡製糸場とか横浜開港資料館をはじめ、日本綿業倶楽部は大阪にあるのですが、そういった調査のほか、J A 三重中央の一志郷土（養蚕）資料館の皆さんの協力を得て、実際に蚕を飼って繭になる過程や糸繰りの作業の撮影なども現在やられております。そして、これ（スライド 7 右下）は伊藤小左衛門 5 世が紡績も検討していて買ったアメリカ製の紡績機です。大阪の綿業倶楽部にあり、ケースに入っていて撮影がうまくいっていないですけど、大阪まで研究会の方々と一緒に行きました。そういう地域の人たちが小左衛門をなんとか研究しようという活動で、非常に精力的に活動なさっているという紹介です。

もう一つ、四日市の桜郷土史研究会も労農・加藤由兵衛を今年の文化祭のテーマにとらえて、その研究に取り組まれております。これは県史編さんグループへ、地元こんな碑（スライド 8 右）があり、碑のことで問い合わせがありました。加藤由兵衛とはどんな人かというのでいろいろ調べたら明治期に桜地域で活躍した老農で、碑は明治 27 年 9 月に建立されています。伊東祐賢がその篆額を書いているのですが、伊東祐賢は三重郡長から津市長、初代津市長です。そして、衆議院議員、後には議員を辞めて藤堂家の家令になっています。老農とは、農事に通じた明治初期の農業改良の指導者のことで、経験豊かな農業技術をもっていました。桜郷土史研究会の人たちが、その加藤由兵衛の研究を現在進めてられています。本年度の文化祭は今月 27 日に実施のようですが、桜小学校でこの石碑の拓本をはじめ、加藤家の所蔵の賞状などを調査して、その成果を発表されるようです。ぜひ、ご覧ください。加藤由兵衛という老農については、私は今まで注目していなかったのですが、いろいろと調べると、非常に有名な人でした。明治 14 年ごろから勸業会とか、特に米の稲作改良、稲作の試験だとか、肥料、肥（こえ）ですね、農業に大切な肥について非常に多くの功績をあげています。それから、各種の品評会に出しまして、多数受賞もされています。これは研究会の方が加藤家に残る表彰状を調べられてよく分かったのです。それに、もう 1 つ、第 3 回内国勸業博覧会に「津桜米」というのを出してあります。それは県庁文書です。それから、明治 24 年には県農業協会という会から賞牌ももらっています。その県農業協会は何かといいますと、これは農業組合につながる県農会の前身であります。明治 21 年に成立した県農業協会から賞牌をいただいて、農業協会の農談会などにも度々出席しています（スライド 9 左）。そして、27 年の 8 月に 65 歳で亡くなって石碑がつくられたのです。これは（スライド 9 右）は、加藤由兵衛の「津桜米」出品票です。「津桜米」というのは、桜村は津藩なので、そう名付けられたのです。皆さんご存じのように「関取米」とか「竹成米」とかが当時あり、それに匹敵する米の品種でありまして、大林雄也（農学士）という人は、『大日本産業事蹟』（明治 24 年発行）の中で、この「津桜米」を評価しております。そして、藤堂藩のお殿様の食に当てたという話が伝えられています。その後、どうも「津桜米」の栽培が少なくなったのか、あまり資料がないのですが、有名な地域の一つの産物だったことには間違いないので

す。

最後になりますが、そういった明治期の博覧会資料は、いろいろと関係文書の有効利用ができます。県庁所蔵の明治期博覧会関係文書 130 冊は、当然新しくできる県立博物館の中に移されて、公文書関係の一環として皆さんに見ていただくことができると思います。この中には地域の産業を知る非常に具体的な資料がいっぱいあります。1 冊の中に何百人という人の名も出てきます。地域で何を生産し、何を出品したかは地域の産業を知るのに非常に具体的な資料であるといえます。

もう 1 つは、近代化をどう考えるかという、当時の意識が分かります。例えば、博覧会でいいました壺屋紙、伊勢型紙がウィーンの万国博に出品されております。日本政府が初めて万博に公式に参加した博覧会ですが、それに三重県から壺屋紙や型紙が出され、受賞をしております。特に型紙は、江戸期の末から明治期にかけて非常に海外に流出していき、何万点というか、ヨーロッパにすごい数があるそうです。その一つのきっかけになったのが、鈴鹿の寺家村からウィーンの博覧会に型紙を出した島村茂左衛門です。

それから、伊藤伝七、三重紡績会社の中心人物ですが、三重紡績会社は東洋紡につながっていきます。これ（ｽﾗｲﾄﾞ 10 右）は、三重紡績会社と書いてありますが、東洋紡の本社は大正 3 年から 9 年まで四日市にありました。東洋紡の本社は四日市からスタートしているのです。その第 2 代目社長に伊藤伝七がなります。伊藤伝七は紡績だけでなく、「イトービール」、地ビール、を第 3 回の内国博覧会に出品しています。専門家をビール醸造のために呼んできて、「イトービール」というのを考えたのです。新聞にも随分たくさんのお告が出されており、当時の近代化に対する意識がうかがえます。

それから、3 つ目は、この博覧会資料は追跡研究が比較的容易な資料であるということです。ぜひ、これを有効利用して地域でお調べいただきたいと思います。

それを申し述べ、これで終わらせていただきます。

進行：

吉村さん、ありがとうございました。

引き続きまして、2 つ目の事例ですが、博物館にかかわる市民や県民の立場からの取組でございます。この取組に関しまして、「三重の軽便鉄道 廃線の痕跡調査」というテーマで、三重県立博物館サポートスタッフ民俗グループメンバーの木下辻松さんをお願いいたします。

事例報告 2

「博物館に関わる市民や県民の立場からの取組～三重の軽便鉄道 廃線の痕跡調査～」

木下 辻松 さん（三重県立博物館サポートスタッフ民俗グループメンバー）

＜事例報告 2 で使用した関係資料は記録集 P. 56～P. 57 に掲載＞

木下：

三重県立博物館サポートスタッフ民俗グループの木下と申します。

サポートスタッフとして県民の立場から取り組んだ活動の事例を紹介させていただきます。

タイトルは、ここにありますように「三重の軽便鉄道」、サブタイトルが「廃線の痕跡調査」ということにしました。(調査報告書現物を示して→) これがその調査報告書の現物です。地域の図書館にありますので、ご覧になってください。よろしくお願いいたします。

まず、私たちの住む三重県ですが、中でも特にこの北勢地方は全国でも非常に珍しい軽便規格車両の鉄道が現在も営業運行しております。軽便鉄道は、全国的にも明治の末から昭和初期にかけて最盛期を迎えておりまして、まさに三重県の近代化進展の時期と期を一にしております。私たちは、県内の廃線路線の痕跡を調査しました。



このタイトルを選んだ理由は、3点ございます。まず1点目は、三重県としての特色があること。2点目は、県内に広く展開しているものであること。それから3点目が、今、緊急に取り組む必要があるということ。それはなぜかと言いますと、当時のことを記憶しておられる方がご高齢になっておられまして、今の時期がその方々の生の声をお聞きすることができる最後のチャンスではないか、というふうに考えて取り組みました。

私達は自然や歴史、文化が大好きで、好奇心、向学心、研究心の旺盛なメンバーで構成されております。今年度のサポートスタッフの登録者数は286名で小学生から80歳代までの幅広い世代で構成されており、私達は三重県立博物館のファンというような気持ちでおります。

さて、この鉄道は「けいびん鉄道」ではなくて、「けいべん鉄道」と言います。その定義としましては、明治43年に公布されました軽便鉄道法によって敷設された鉄道ということなのですが、一般的には線路の幅が762ミリの鉄道というのが分かりやすいと思います。76.2センチといいますと、大人の肩幅より少し広い感じですね。(両手でおおよその幅を示して→) これぐらいの軌間、線路の幅です。ナローゲージとか、あるいはナロニとも言われております。

この写真は、三岐鉄道の北勢線、それから三岐鉄道の三岐線の車内風景です。右は私たちが体験乗車をしたときの写真で、左が軽便鉄道規格の車両の北勢線です。右はJR在来線と同じ規格の三岐線の車両です。車両の構造は同じですが、見てご覧のとおり、広さの差は全く歴然としておりまして、北勢線のミニ電車ぶりがよく分かると思います。北勢線では対面シートの乗客が足を組みますと、その間を通り抜けるのも困難というようなことですね。

次に、この地図は、大正14年の、まさしく日本の近代化が最盛期の頃の県内主要部交通路線図です。北のほうから桑名、四日市、津、松阪、山田、ここが上野ですね。それから、注目したいのは、

員弁川、雲出川、櫛田川、これ大阪湾に流れている木津川です。県内にはこの時代に、この北勢軽便鉄道、それから、この線が四日市鉄道で、これが三重鉄道ですね。これは津の安濃鉄道です。中勢鉄道、松阪、伊賀鉄道と、この赤線で示されました7路線が運行されていました。現在、北勢軽便鉄道は三岐鉄道の北勢線として、三重鉄道は近鉄の内部、西日野線として、相変わらず軽便規格の車両で地域住民の方の足として活躍しております。

又、四日市鉄道は、近鉄湯の山線として広軌化されまして、地元の足以外にも観光路線としても活躍しております。一方、安濃鉄道、中勢鉄道、松阪鉄道は既に廃線となっております。伊賀鉄道は、この西名張と伊賀神戸の間が近鉄線との並行区間でしたので既に廃止となっております。

地図をよく見ていただくと、いろいろなことに気付くことができます。まず、軽便鉄道の路線をよく見ていただきますと、何か盲腸のような感じになっておりまして、全部行き止まりの線になっております。伊勢湾沿いに走る幹線を背骨としますと、まるであばら骨のようで、それらの幹線に接続している軽便鉄道、接続していない軽便鉄道とバラツキがあります。ちなみに終戦までに廃止になってしまった軽便鉄道は、すべて幹線鉄道駅と接続しておりません。

次に気付く点は、大きな河川に並行しているということですね。これらの河川は昔から水運が非常に盛んだった川です。このことから、軽便鉄道が三重県の近代化に大きくかかわっていて、次に出てくる地図と比較するとよく分かります。(地図を映して→)この地図は、先ほどの地図の32年前、つまり明治25年の地図です。この時期の流通の主力は、まだまだこういう街道ですね、それから河川を利用した流通が中心です。

私設鉄道の関西線が草津から四日市に延びてきております。官設鉄道の東海道線が鈴鹿峠を避けまして、関ヶ原経由で開設しましたのが明治22年の7月のことですが、関西鉄道はその翌年の12月には草津と四日市の間を開通させております。四日市がその当時、すごい復活のパワーがあったかなと感じております。主な交通は、まだ東京と京都の両京を結ぶということとか、伊勢の国、三重県では参宮、つまりお伊勢参りのお客を運ぶことに優先順位があったように思います。

私たちこのテーマに取り組んだのは、平成20年度から平成22年度の3年間でした。軽便鉄道は、先ほどの地図でおわかりのように県内各地にありましたので、メンバーを居住地別に小グループに分けました。北勢・中勢・南勢・伊賀、4グループです。毎月、定例会議を開きまして、調査結果の報告と意見交換やグループの意識合わせなど、取組の中間的な棚卸しを行いました。これはメンバーとの1ヶ月ぶりの顔合わせとともに、全員の情報共有にとっても効果的でした。

調査活動は、みんなで決めた調査活動方針に基づいて行いました。聞き取りではお相手が高齢の方が多いということで、心を開いていただいて昔を思い出していただく工夫も必要です。こういう工夫や苦労話も定例会議ではみんなでディスカッションして共有化したものです。活動は基本的に現地を歩いて現物に触れるということを基本に取り組みまして、その中で自分の思いが聞き取りで証言を得られたようなときは感激も一入でした。

また、北勢線の体験乗車を兼ねてフィールドワークも行いました。これはメンバーの親睦を深めるにはとても効果的でした。3年目に入りまして現地調査もおおむね目安がつきましたので、編集会議を立ち上げました。調査報告書は、少しでも多くの方に読んでいただきたいというような考え方から、まず、私達は目次の作成に力を注ぎました。これは目次を共有することによりまして、メンバー全員の目線を合わせるとともに、執筆部分の担当を明確にするということもできました。校正も初めての経験で、素人の私たち自身で行いました。試行錯誤しながらの校正で、10数回打ち合わせを持ち最終校正ができあがったときは、ヤレヤレということと、本当に大丈夫だろうかという

ような気持ちでしたが製本された調査報告書を目の前にしたときは、特別の感激を味わったものです。

感想としましては、立ち上がり時、私達全員が全くの初めての取組みということでもあり不安一杯だったのですが、メンバーの旺盛な好奇心とか、何事にも物怖じしない実行力がありましてクリアできました。中盤から終盤にかけては、多様で多彩な仲間のパワーが全開しました。それぞれの個人の強みが遺憾なく発揮されまして、たくさんの情報が集まり、その後の編集に入りました。

その結果、調査報告書ができて私達が今まで知らなかった多くのことを学ぶことができました。それは三重県の軽便鉄道は、明治・大正・昭和初期の近代化に大きく貢献しているということです。理由の一つとしては、軽便鉄道は簡易な認可手続きと非常に安い建設コスト、それから国の手厚い保護で道路インフラが全く未整備の当時、人や物の地域輸送に一定の役目を果たした。それから、二つ目に地域の人々に文明開化や近代化を言葉ではなくて目の前にその証を見せてくれました。例えば蒸気機関車を目の前で見るとか、駅舎に掲げられた大きな時計を見るなどです。時刻表は、人々の時間の管理を分単位まで縮めてしまいましたですね。今までは四半時（シハントキ）というのが最小単位でした。それから、切符を買えば誰もが自由に平等に同じ車両に乗ることができました。これは非常に社会文化的な大きな変革だったと思います。こうして人々に近代化の証を示して、当時の人に夢と希望を与えたのだらうと思います。

三つ目は、地域の大地主さんとか資産家がお金を投資して企業活動を行うことにより産業資本家が育っていく一つのきっかけを作りました。

しかしながら軽便鉄道は鉄道の最大の長所である大量高速輸送機能がなかったことから、多くは消え行く運命でもありました。その中でも当地のように会社の営業努力や設備改良、あるいは、沿線の開発、地域の人々の協力、大資本との合併によって、平成の現在でも県内では2路線が活躍しております。全国では3路線で、その一つは、富山県の黒部峡谷鉄道でこれは観光路線ですから実質営業運行をしているのは三重県のみということになります。

次は読んでいただいた方からの反応です。自分の話したことが本になって記録されるのはとてもうれしいとか、報告書を読んで私も廃線跡の現地へ行った。あるいは、大正とか昭和の頃の古い地図や当時のパンフレットが出てきたので博物館に寄贈したい。更に表現とか解釈でいろんな意見が寄せられまして、非常に関心が高いということが分かりましたし、これらの情報が今現在も集まってきております。

最後になりますが、現在、私たちは次のテーマ「伊勢講」について取組中です。

私たちはこの活動を通じ県民の一人として、郷土三重の自然・歴史・文化を大切にしたいという気持ちはますます強くなってきております。それらの遺産、資産を守り次の世代に継承するために何かしたい、何か行動したいという皆さんとサポートスタッフ活動に参加し体験することにより三重県全体が文化を大切にする博物館になるだろうと思います。そうすればすばらしい郷土ができるというように思います。

そして、三重の近代化の証として活躍した軽便規格の電車が、現在でもこの北勢地域で活躍しているということを全国に情報発信したいものです。

以上、ご清聴ありがとうございました。

進行：

木下さん、ありがとうございました。

3つ目の事例は、四日市市で地域資産を活用する取組というテーマで、建築家で四日市地域まちかど博物館推進委員会代表をしておられる久安典之さんをお願いいたします。

事例報告 3

「四日市市で地域資産を活用する取組～たいせつな「つながり」～」

久安 典之 さん（建築家、四日市地域まちかど博物館推進委員会代表）



＜事例報告 3 で使用した関係資料は記録集 P. 58～P. 61 に掲載＞

久安：

久安と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私からは、まず、主に『四日市地域まちかど博物館』という取組についてお話させて頂き、その後、それに関連するいろいろな取組をお話しさせて頂きたいと思います。今日は、『四日市市で地域資産を活用する取組』ということで、テーマを「つながり」としてお話しさせていただきたいと思っています。

まちかど博物館といいますと、どこまでご存じの方がいらっしゃるかわかりませんが、元々は伊勢でフィールドミュージアム的なことをやろうということで民間で始め、それを県のほうで全県的に取り組もうということで、いろんな地域に声をかけて取組が始まったわけですが、その中で四日市地域は、ほかの地域、伊賀だとか松阪だとか桑名とか、そういった地域がどんどんできあがってくる中で、空白のまま残されようという状態になっておりました。三重県の予算もなくなっており、それは寂しいなという状態だったわけですが、私は仕事で建築の設計をしております、建築を考えるうえで、街並みだとか、まちづくりだとか、若い学生の頃からいろいろと興味がありまして、独立したのを機にそういったことをやりたいなと思っていた矢先に、そういう状態が重なり、取り組んでみることにしました。まちづくりというのは、いきなり突拍子もないことをやろうと思っても、なかなかかみ合わないところがあると思っていましたので、そういうまちかど博物館というネットワークを作り、地域に対していろんな意識がある方を発掘し、そういう方たちとそういう活動がどんどんできてくればいいなというところで、時期が重なったこともあって、元々

の事業主体というか、全県的な取り組みを始めた県に相談に行き、始めたというわけです。

四日市地域としては、2008年の7月10日に募集を開始し、その後、2009年の3月末にいったんオープンということで50館ぐらいになり、それから徐々に増えて、現在、81館という状態になっています。まちかど博物館をご存じでない方もいらっしゃるかもしれません。概略をお話ししておくと、それぞれの地域で行けば見せてもらえるところということで、この地域ですと、例えば萬古関係の工房だとか、酒蔵だとか、あと個人でコレクションされている方だとか、行けば見せてもらえるところを一つの館として名乗りを上げてもらって、それをネットワーク化させていこうというのが我々の取組です。

現在、推進委員としては10名ぐらいで、館長さんを兼ねている方とか、いろんな方がいます。会議は月1、2回程度やっています。特徴としましては、ほかの地域に比べて推進委員が比較的若いとか、館長の発掘をいろんな団体だとか組合とかそういったものを通さずに直接いろんなつながりを元にしてアプローチしているとか、それから、元々私がやりたいと思った理由が、地域づくりとかまちづくりとかということなので、ものがどうこうというのも、それはそれで必要なんです、つまり自主性だとかやる気だとかいったものを重視してぜひ参加してくださいという形の取組をしています。

四日市地域を一步下がつて冷静に考えたときに、三重県内一の人口を抱えており、工業都市であり、それから旧東海道の宿場町ということでいろいろ文化はあったわけですが、戦災とか台風とか公害とかいろんなことがありまして、いろんなダメージを受けていると。そして先ほどお話ししたようにまちかど博物館の空白地帯ということで何とかしたいと。それから、まちづくりとしてのそういったNPO的な活動がちょっともの足らない感じでしたので、私どもでは文化のインフラが必要と感じ、まちかど博物館のネットワーク化を目指したということです。

当初からまちかど博物館の意義について、我々なりにいろいろと考えたわけですが、まずは地域文化の掘り起こしをすることによって、いろいろ観光だとか教育だとか生涯学習だとか地場産業の活性化だとか、それから、その地域だけではなくて地域内外のネットワークということも視野に入れながら、最終的には地域文化の活性化、さらには、それがいろんなことへつながっていくのを目指しています。

実際に、観光の面ではいろいろな体験等で訪れる方も増えてきておりますし、教育という面では、小学生が夏休みの自由研究でいろんな館を回ったりとか、生涯学習という面では、例えば年配の老人会がまちかど博物館巡りをしたりとか、地場産業の活性化という面では、まちかど博物館の館長さんでもある萬古焼の作家さんたち数人とシクラメン農家のまちかど博物館さんがコラボレーションしてチャリティーオークションみたいなものを行ったりとか、少しずつまちかど博物館がいろいろな活性化のきっかけになってきています。

先ほどオープニングの話をしました、最初、そのお披露目の場所としてどこがふさわしいかということでいろいろと検討しました。今は近鉄四日市駅に皆さんの動きが移ってますが、JR四日市駅の建物の旧三岐バスの待合所があったスペースがなかなかおもしろい場所だったので、我々のオープニングの場所としてふさわしいのではないかとということで、オープニングイベントとして、このときは50館の館長さんを対象に出張展示というかたちで出展していただきました。こんなかたちで会場でもいろんな人との会話が生まれたりとか、外国人が来て木を手で触れて触ったりとか、着物文化の話になったりとか、そういった交流が生まれたこと、また、そのイベントを文化的な市民の取組ということで各メディアに取材していただき、それがいろんな人に伝わったことと

いうのは意義が大きいのではないかと思います。

その翌年ですが、当初は四日市市内を中心に 50 館集まったわけですが、その後、菰野町、朝日町、川越町も力を入れ、グランドオープンイベントというのを去年の 3 月に開催しました。そのときには、四日市地域が空白で、ほかの地域のまちかど博物館の取組は以前からありましたので、それぞれの地域の団体の代表の方に来ていただき、今日のような公開のディスカッションを開催しました。その翌日には、広く市民にお披露目をしようということで、商店街のアーケードで出張展示をさせていただきました。このときは体験をテーマにしたイベントをしました。

これが年に 1 回の総会の風景で、まだ 2 回開催しただけですが、その総会には結構たくさんの館長さんが集まっていたで、皆さん笑顔で楽しく参加していただいています。その後に「まちかど博物館巡り」というかたちで、このときは 3 館、皆さんと地域内のまちかど博物館を巡りました。

三重県内ですが、先ほど四日市地域は 81 館とお話ししましたが、他の地域も含め、全 10 地区の各地域ごとにそれぞれの基準を持ち活動されており、9 月 15 日現在で、県内合計 512 館のネットワークがあり、全体としてもときどき地域ごとの交流があります。先日も松阪のまちかど博物館を四日市の方たちとバスで 5 館ぐらい巡ったんですが、そういう全県的な交流も生まれています。

まちかど博物館としてはそんなかたちでいろいろなつながりが増えていますが、せっかく今日、四日市市で地域資産を活用する取組ということでお話をさせていただけるということで、ほかにもいろいろと活動している事を少しずつお話しさせて頂こうと思います。

四日市ウミガメ保存会。四日市はコンビナートの街ですが、そこにウミガメを呼び戻そうということで、四日市ウミガメ保存会というのを、一昨年正月ぐらいから仲間と始めました。これも博物館ということと言えますと、自然史という意味合いもありますので、少しお話しさせていただきます。毎回 100 人前後の参加者が月に 1 回早朝清掃をして、その後にイベントをしています。そのイベントをなぜやるかという、清掃活動をしているにも関わらず、たくさん人が集まると、そこら辺を踏み荒らしているといけないということで、鳥とか草花の勉強をしていこうというところから始まった訳ですが、子どもたちにもたくさん参加してほしいということで、氷の彫刻をやったりとか、流木を削ったりとか、そういったこともしております。

それに関連して、その場所は四日市市内の楠町の吉崎海岸というところですが、「楠地区まちづくり協議会」という中の 3 つの部会のうちの 1 つの部会長をやっています。そこで田んぼアートをやろうと。いろんな意味を含めて地域に農地があるということを地域内外の皆さんに知ってもらおうということで去年からやっているんですが、その図柄を、これは公募で小学生が応募した案を採用したのですが、ウミガメを取り入れて、それを海岸と田んぼ、田園風景を印象づけようということで開催しました。

私、事務所が商店街の中にありまして、その商店街をうまく活用できないかということで、いろいろと活動しています。先日も、毎年やっている「まちなか文化祭」というのがありまして、そこでクラシックカーを並べるイベントを企画して開催しました。商店街という歴史と車の歴史ということで被せ合わせれば、車が古くてもおもしろいよ、美しいよ、カッコいいよというのと同様に、商店街の古いというだけではなくて、違う面にも目を向けてもらえるのではないかとということで、つい先日、11 月の 5、6 とやらせていただきました。

その商店街につながる諏訪神社の活性化プロジェクトというのもやっています。これは去年の 9 月から有志 10 数人で始めたんですが、諏訪神社がかつて交流の場だったところを活用していこうということで、まず、ちょうど 1 年前ぐらいに隣の諏訪公園で毎年開催している「キャンドルナイト」

というイベントに合わせて、夜に松明を焚いて獅子舞を開催しました。そういった伝統芸能だとか、篠笛の発表会だとか、落語会とか、そういったものをやっております。

それから、「歴史ゼミナール四日市」という歴史の講座が、今、25年ぐらい続いていて、そのお手伝いもさせていただいています。20周年のイベントが数年前にあったんですが、今日チラシを同封させていただいたと思いますが、明日、「久留倍官衙遺跡について語ろう」というシンポジウムをやります。

県の文化財保護指導委員という仕事もさせて頂いています。県の北勢地域の建造物のパトロールということで、四日市ですと末広橋梁等がどういう状態かという調査・報告させて頂いています。

それから、先ほども話がありましたが、四郷郷土資料館。建築家協会で「三重の建築散歩」という記事をローカル誌、具体的に言うと「NAGI」という雑誌があるんですが、そこで連載しております。私が記事を担当する際に四日市の四郷郷土資料館を候補で上げさせていただきました。遷宮に合わせてその雑誌の連載を一冊の本にして発表する予定です。

その建築家協会で「建築文化講演会」というのを毎年やっているんですが、これは地域の建築という文化をいろんな形でとらえてほしいということで毎年開催しています。今度12月4日ですか、三重大学の中にアントニン・レーモンドという建築家が設計した建物がありまして、それについてのシンポジウムを菅原先生に音頭を取っていただき、建築家協会と三重大学の、ちょうど博・学連携推進室とで協力してやっていこうということで準備しております。

それに合わせて、毎年巡回建築展というのを県内各地で開催しており、これ（※写真）は伊賀上野城でやったものですが、今度のアントニン・レーモンドの講演会のときに合わせて三重大学内でも、先ほどの「建築散歩」のパネル展示をする予定です。

これ（※写真）は、四日市市内の富田一色という町並みですが、短冊状の町割りが残っていて、それを何か活かさないかという気がありまして、菅原先生に見に来ていただいたところ、おもしろいねということで大学院の授業で取り上げていただきました。その後それを冊子にまとめていただいて、今度は地域への報告会をしたら、地域のほうで喜んでいただきました。それがこの後、どう発展していくか分からないんですが、少し可能性を感じております。

こんなかたちで今日、いろいろざっと自分なりに頭の中で整理してみたのですが、最初に言った「つながり」という話なんですが、皆さんの周りには家族ですとか友人ですとか同僚の方ですとか、いろんなかたがいると思います。その皆さんとまちかど博物館とかもそうですが、いろんなものがつながって地域につながって行って、その地域がいろいろほかの地域とつながって、その中心的な役割として、文化的な面で言えば県立博物館がその役目を果たすというかたちになって行って欲しい。私からはこういう「つながり」を大事にしていきたい！ということで事例報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

進行：

久安さん、ありがとうございました。

ここでパネルディスカッションの準備をいたしますので、しばらくお待ちください。

5 パネルディスカッション

テーマ「三重の近代史から地域の明日を探る」

《コーディネーター》

菅原 洋一さん

(三重大学大学院工学研究科建築学専攻教授)

《パネリスト》

安蘇 龍生さん

(福岡県田川市石炭・歴史博物館館長)

吉村 利男さん

(三重県史編さん専門員、三重大学附属図書館研究開発室客員教授)

木下 辻松さん

(三重県立博物館サポートスタッフ民俗グループメンバー)

久安 典之さん

(建築家、四日市地域まちかど博物館推進委員会代表)



進行：

お待たせいたしました。パネルディスカッションの準備ができました。

パネルディスカッションでは、地域の再生に向けた取組の基礎となる遺産の価値を的確にとらえることにより、これを資産として生かしていくための課題と展望を探ります。

コーディネーターには、三重大学大学院工学研究科の菅原洋一先生をお願いしております。また、パネリストには、事例報告をしていただきました吉村さんと木下さん、久安さんに加え、安蘇先生にもお入りいただきます。

ご登壇をお願いいたします。それでは、菅原先生、よろしくお願いいたします。

菅原：

お待たせをいたしました。では、シンポジウムに入ります。

今、これまでに各先生からの取組のご報告をいただきました。改めて今日、議論したいこと、意見交換したいことを整理いたしますと、今、三重県にございます近代のいろんなものがどういう現状にあるんだとか、あるいは、それをどう活用していくことができるのかということが一つ。

それから、近代のいろんな資料、県庁資料のような文字資料もございますし、写真のようなものとか、記憶のようなものもあるかと思うんです。そういった近代のいろんな資料をどう残していくのか、使っていくのかということなんです。

それから、お話を伺ってますと、やはり近代のものは、ただ博物館だけががんばって残せばいい、使っていけばいいということではなくて、実際に地域の中で見出して、いろんな発想を膨らませて、それを生かしていくというように、結局は人の問題が非常に大きいということを改めて感じたわけです。こういったことを軸にいろんな問題を発見することができればいいなと思っております。

まず、最初に基調講演をお務めいただきました安蘇先生に、私も含めて4人の話を聞いていただきまして、まず、コメント、あるいはアドバイスをいただけることがありましたらお願いをいたします。

安蘇：

アドバイスというよりも、私のほうが勉強をいっぱいして、お土産いっぱい持って帰れてうれしいという気持ちでおります。とくにそれぞれの市民が持っているいろんな潜在的な能力とか、あるいは持つておる品物とか、そういうものがみんな違うのに、それがつながっていくというまちかど博物館の発想というのは、これはぜひ私どものほうでも何らかの形で活かしたいという思いで今喜んで聞いていたところです。

そこで、関連しまして、多少それに近いことをやっておりますのは、先ほども言いました炭坑節ですね。これはせっかく全国、今はほぼ世界的にも広がっておりまして、この前もイギリスの女性の方がうちに来ましたから、もう5分も手ほどきしたら一緒に踊れるわけですね。一番単純な仕事でありますし、それでいて結構共有できるわけで。それが今市民の間でもかなり広がっているから、そのまま石炭が昔あったで終わっちゃいかんばいということで、今度は6回になりますが、6年前、ちょうど私が館長になってから、今の伊藤という市長が、昔やとったんだからやろうやないかと言いついて、一部異論がございましたが、やり始めたら段々盛大になってきたことが一つと、もう一つうれしいことに、今、農村がほとんど崩壊しておりまして、崩壊という言い方は語弊がありますが、若い人がいない、昔の青年団でやっていた時代がないんですね。

ところが、JCといって、事業をやっている40歳前の若者たちが青年会議所というのをつくって活発に活動しています。この人たちが炭坑節祭りの中核に入り始めて企画等を作り出して、昨年から始まったのがキャンドルナイトというやつです。さっきもちょっと出ておりましたが、手作りのいわゆる廃油でつくったローソクで一晩、今年は2万個を並べました。それで山本作兵衛という字も作ったんですが、「世界平和」とか「東北がんばれ」とかそういう全体の気持ちの表現で小学生たちが田川地区の全員が一つずつ作って出すというんですね。こういう形で人のつながりが広がり始めたんですが、これが意図的で、かつ、地域づくりにつながる点では、こちらの博物館を中心にしたさっきのつながりと大変私は感銘を受けて聞いたところですので、持ち帰ってみんなと検討していきたいということで、ちょっと所感というよりもお礼になりますが、一言申し上げます。

菅原：

ありがとうございます。実際に使っていくということが、そのもの本来の役割を果たさせる、復活させるということでもありますので、使っていくのが一番良いことなんでしょうと思います。特に久安さんがお話しされたような建築は、元々使うために造られて、ある社会的な役割を持って使われていたものですから、本来とは違う形ではあっても、そのものの大事なところを生かしながら使っていくことが必要だとお聞きして思いました。

いろいろお話をいただいたんですが、今日、久安さん、あるいは木下さんから、実際に地域のいろんなものを見て、これはおもしろいという調査活動から入っていった、それを使っていくようになっていくと思いますが、それで、まず木下さんにお伺いをしたいと思います。木下さんは県立博物館のサポートスタッフということで活動をされています。それには地域のいろんなものを発掘するという意義もあるんですが、当然そういう活動をされることにいろんな喜びがあるんじゃないかと思うんです。そういうご自分の参加された動機とか、活動して感じておられることがありましたら、あらためてお話しいただけませんか。

木下：

先ほどの発表の中でも話しましたが、私たちは調査した結果を何らかの形でアウトプットをしようということ取り組みました。私自身もサラリーマンとしての第一線の現役を退いています。私達の仲間の多くも、ある一定の年齢までサラリーマン経験しておられ、皆さんそれぞれにそれなりのキャリアを経験してみえる方が多いんです。そこで、1人ではなかなかできないことを、仲間ですべての目標を作ってやっていこうというのは非常におもしろいものであることがわかりました。多様で多彩な方の集まりでそれぞれ持つ特徴がありまして、調査活動するにしてもインタビューするのが得意な方とか、あるいは、ものを調べたりするのが得意とか、自分のネットワークを通じていろいろな資料を集めるのが得意な方等がおられます。又、自分の小さい頃の夢で、社会人になったため仕事に忙殺されてできなかった夢をこの機会に実現したい等の考えを持っている人もメンバーにおられます。私自身、調査活動で大変な事もありましたがサポートスタッフ活動は基本的に楽しいもので、それは自己実現できる機会を得た。というようなことでした。これも博物館のサポートスタッフにならなければ、自己実現のチャンスも多くの仲間も得られなかったと思っていまして、博物館活動で達成感が得ることができて自分の人生を充実させているというのが率直な感想です。

菅原：

ありがとうございます。久安さんのまちかど博物館の個々の館長にしてみれば、夢の実現といえますか、自己実現の機会になってるかと思いますが、そういう個人ベースでの発掘、評価作業、あるいは情報の発信作業ですね。これは久安さんのほうからもご意見をいただきたいと思います。そういうものを見出して、ちゃんと自分の取組として考えていくということについてですね。まちかど博物館でやられているような地域の方々の取組についてご意見をいただきたいと思います。

久安：

今日も館長さん何人か来ていただいているんですが、自己実現という話でいきますと、質問の答えになるかどうか分からないですが、結構登録していただいた後に、最初はどうか分らないという方が、半年後ぐらいに行くと、館長さん自身、展示が充実していたりとか、すごくや

る気になっていきいきとした顔をしていたりとか、ある館では、広報部長さんをつくっていたりとか、いろんな形でやる気になってもらって、更にやる気になっているというような、たくさんそういったお話があつておもしろいなと思いましたね。

菅原：

どんどん、どんどん変わっていく。自分の創意で発展していくことがあるんですね。そのとき、個々の館での工夫もあると思いますが、それが仲間になっていることによって、お互い触発されるとき、全体としての動きというのはなんかあるんでしょうか。

久安：

全体として言うと、まず、館長さんで先ほど話した、オープニングイベントをした直後に、館長さん同士で今まで見ず知らずだった人が、いきなり5、6人で旅行に行ったりとか、そういう方もみえまして、それぞれ行き来して、情報発信という意味でそれぞれ違う分野の人たちが交わることによって、ジャンルは違えど結構想いが近いところがあつて、そうすると情報発信される場もすごく増えているようで、その辺でおつき合いされている方は、どんどんそれぞれの館の来館者も増えてったりだとか、こんなところあつたんやねという形で、いろんなことをほかの人に知ってもらおうという機会も増えているのが見受けられます。

菅原：

ありがとうございます。吉村さんは、地域のいろんな研究会活動に関わっておられますが、そういった住民主体のいろんな研究活動に関わってお感じになっておられることがありましたら、コメントをお願いします。

吉村：

先ほど2つの団体の事例をご紹介申しあげたのですが、そのときお話ししました桜の郷土史研究会は、前からいろんなテーマを設けて研究されています。事務的な流れでは、様々な質問事項が最初あるわけで、地域にあるもの、地域を知りたいということが大きな研究会の皆さん方のねらいです。どちらかというと、元々地域にお住まいの方ではなくて、他所からみえた方が調べていることが桜の場合は多いようです。

それから、もう一つ、四郷の郷土歴史研究会は、元々四郷でお育ちの方々、住んでみえる方々がやってみえます。小左衛門は語り尽くされているように思うのですが、やはりやっていくと様々な課題が出てきます。例えば、今回のビデオ作成の中で、やっぱり実際に蚕の生育まで撮りたいとかですが、現在、三重県内に生産的に蚕を飼っているところはないわけです、ただ、養蚕研究家、養蚕を引き継ごうとしている人たちがいます。一志にJA三重中央の養蚕資料館があるのですが、そこに養蚕のいろんなセットがあつたり、今も蚕の種を残していきたいといわれている方が何人かおられたりして、その方々との交友関係もできました。一つの地域の研究だけではなくて、何かを目的としてやっていくためには、他の方々とつながりができてきます。その中を取り持つことなどをやっているのですが、活動のアドバイスをし、誰々に聞けばいいよとか、そういう研究方策みたいなものを博物館で指導できるようなスタッフがいるのではないかと、私の中では特にグループをつなげる役割が必要じゃないかと思っています。

菅原：

ありがとうございました。市民活動としてのいろんな調査研究があるけども、それをつなぐものとして博物館の役割があると。博物館の存在があるから、逆にそういう市民のいろんな活動が誘発されていくというふうなことかと思います。

安蘇館長の田川の博物館、その前身は資料館で、そういった資料館、博物館ができるにあたっては、その地域での研究会の活動が非常に欠かせないものであったとお聞きしましたが、これについて教えていただけませんか。

安蘇：

ちょっと短時間、そのことで取りたいと思いますが、その前に山本作兵衛さんについても一言申しあげたいのは、今の問題ですね。実は、さっきもちょっと言いました県立大学を中心に、作兵衛さんの日記をずっと解説して、今10年になります。今、10巻ほど印刷物になって、後数年かかるということですが、私どもの持っている日記の記述内容と、県立大が報告して今出しているものと、最近、あることで照合調査をいたしました。その中で感じましたのが、先ほどらい出ている、小さいときの夢の実現が自己実現につながってきて達成感になったということは、作兵衛さんがずばりそのとおりなんですね。

というのは、彼は非常に絵が好きな人で、小さいときから絵をいっぱい描きたかったんですが、余裕がなくて、結果としては絵を描くという気持ちは封じ込んだまま、50年間、炭坑現場で働いた。終わってみて、何かできることないかというときに、最初は文字で自分の生涯を残そうとしました。ところが、1,400枚書き上げたところで、家族からの猛反対で、ついに泣く泣く焼いてしまったんですね。ところが、文字は焼いたけども、おれには絵があるということで、また絵に戻って、広告用紙の裏に描き始めて、そして、さっき言う昭和33年から画用紙に墨で書き始める。

これで彼が今までの日記の中で、これはまだ公開してませんが、自分というのはもう存在感がない人間だとずうっと書いてるわけですよ。ところが、墨絵を書き始めて本になってから、認められ始めたら、ものすごく人間が、私、あんな先輩のお年寄りの人に対して言っていないかどうか分からんけど、大変化を遂げたと思いますね。もう充実した日頃の姿と、酒は飲むんですが、酒の飲み方もおいしくなったと思うんですよ。みんな酒を持ち込むものだから、一言書いてます。焼酎は体に悪いが清酒がいいと書いたら、それを聞いてみんな清酒を土産に持って来て、そうしてどんどん一緒に飲みながら描け描けということで、またがんばって描くと。変な言い方ですが、これはやっぱり作兵衛さんの自己実現の究極の姿を我々が今いただいていると、こう言うように思ったわけです。

それから、もう一つが、資料館か博物館の関係で、さっきちょっと作兵衛さんは建築委員に入っていたと言いましたが、実は資料館をつくるということについては非常に悩ましい問題で、炭坑はどんどん潰れましたもんですから、周りは全部失業者の集団ですね。したがって仕事を保障しなきゃならん。というときに考えついたのが、筑豊最大の炭坑の跡地である、現在の博物館のある地域が、三井田川鉱業所伊田堅坑という炭坑の跡地で、約10年間、廃墟になっただけですね。ここを整備じゃなくて、壊して公園にする。いわゆる都市公園に政府から援助金をもらって、ここで就労事業を興そうということが実はありました。そのことによって失業者がかなり救済されてきて、生活することについてのプラスが出てくる。その中でどれを残すかというときに、先ほどの炭坑節があるじゃないかということで、煙突と櫓だけは絶対残せと。これは市民と市長が一致して残ったわけ

ですね。したがって、今は全国では珍しい炭坑の名残を市民と市長の意識の中で残されたうえで、周辺をきれいな公園化していく。ただ、大工事をやれませんか。発掘調査は楽です。つまり史跡にしようと思ってうちの学芸員が掘りましたら、なんぼでも下から出てくるのね。浅く埋めて上に土を被しているだけですから、その点は非常にありがたい文化財の宝庫でもあるんですが。これは別のこととしても、人が生きるということをまず前提にした場合、そういう手段の中でふるさとを活かしていくかという知恵がやっぱり私はあったというように思います。簡単に言うとそういうことでございます。

菅原：

ありがとうございます。山本作兵衛のお話を伺って非常に面白いと思いましたのは、作兵衛さんが絵を描くのに、図書館長さんがいろんな支援をしてどんどん描いてもらって、描いた絵はきちんと残るような仕組みを作ったと。その結果、それがその後に世界的にも評価されるものになっていったということですから、単純に古いものを残すということではなくて、記録というのを作っていく。それがご本人とすると自己実現でもあるし、社会的にもすごく意味を持ってきているということだと思います。ですから、そういう記録の残し方、作り方ということが一つ大きな問題としてあるんじゃないかと思います。

それでは、今回の博物館は、公文書館機能も併せ持つものであるということですが、吉村さんにお尋ねをしたいのですが、吉村さんが今まで県史編さんに携わってこられて、三重県の公文書についても一番よくご存じの方ですので、博物館では公文書類をどのようにして活用していくことができるのかについてご意見をいただければと思います。

吉村：

公文書館とか、古文書館とか、文書館とかいろんな言い方があります。ただ、名前はそういう言い方がありますが、扱うのは文字で書かれたもの、あるいは絵で描かれたものを含めて、紙に書かれたいろんな文書類です。

博物館の中で展示機能というのがありますが、展示でガラスケース越しに見るのでは中身、実体はよく分かりません。実際に地域のことを調べようと思うと、一枚一枚簿冊をめくらないとできないですね。したがって、公文書館機能を持つというのは、単なるいい文書を見せるだけではなく、県民の方々が一枚一枚手で簿冊をめくれるということが大事なのです。その機能をどう持たすか、そのためには、この資料を見たら、こういうものが載っていますよ、先ほどの博覧会関係資料の中にお宅の地域のこの人が載っていましたよ、という指導ができなかったらだめなのです。単なる簿冊の目録だけ示したのではいかん。だから、文書に詳しい人がちゃんといなければだめだというふうに思います。特に近代史の専攻で、全部の文書、どんな文書に何が載っているかということを知っていなかったら、文書館機能を果たしたことになると思います。県庁文書だけではないのです。だから、県史編さん事業で集めたいろんな資料もあります。県史編さんは、いろんな方々からはものすごい経費を使って資料を集めました。20何年、ちょうど29年目ぐらいになるのですか、その間に集めたコピーの文書がいっぱいあり、マイクロ撮影したコピーがいっぱいあるわけです。それを単なる品物だけ移したのでは公文書館の機能は不可能だと思っています。分かる人を育成しなきゃいかんし、そういうアドバイスをできるようにしていく必要があるのだと思うのです。ちょっと激しい話になって申し訳ないのですが、そんなふうに思うのです。

菅原：

ありがとうございます。これは後で県立博物館の布谷館長からコメントをいただきたいと思います。

それで、近代と近世、古代中世が違う。非常に違うのは、近代のいろんな資料というのは、ほんとくとどんどん無くなってしまふ。消えていくということですね。ですから、そういったものをどうやって残していくのか、あるいは、それをよりどころにしてどのようにして我々がいろんなことをやっていくのか、十分考えていく必要がある問題だと思います。

今、県立博物館ではいろんな古い写真を集めることも事業としていらっしゃると聞いております。そのことも後でまとめて館長からもコメントをいただければと思うんですが、今、市民団体のほうでもそういった写真を元にして、あるいは地域の方のいろんな記憶を元にして、かつての町の景観を復元しようと考えていると聞いております。フロアにいらっしゃいますので、お話しいただければと思いますが、津の文化協会の真弓さん、今、考えていらっしゃることをお話しいただけませんか。

真弓：

津文化協会の真弓と申します。

私もかつては高校の美術の教師でございまして、そういう絵も描いておりました。今回、私たち津文化協会では、町絵づくりを考えてまして、特にお城を中心とした城下町の再現をしていきたいと思っています。金沢ではないですが、津もそんな真似ごとをしたいと思って取り組んできているわけです。

ところが、津市は7回空襲に遭いまして、昭和10年代、この辺の資料というのは市に聞きに行っても、燃えてしまっておりませんというわけですね。第一、その戦前の地図の一番新しいものというのは、大正11年の地図しかないということです。商店街の写真は結構あるわけですが、私どもが住んでいる丸之内のほうは丸っきり無いので、手掛かりはないわけなんです。

そこで、僕も絵を描いてますので、まだ辛うじて生存してみえる地元の高齢者の方にお話を聞いて、その人が絵を描けるのならば描いていただく。あるいは、描けなければ私どもが一所懸命で聞き取りをして、絵を描いて、戦災前、ちょっとでもかつての文化が残っていた津の町の再現をしていきたいと思うわけです。

戦災前の津市というのは、私もその町を描いておるんですが、全く想像がつかないんですね、戦後生まれの人間としては。ただし、私どもの親の世代は知っていることがあって、親が見た風景を私たちもういつぺん見たいし、また、自分の子どもたちにも伝えていきたいと思っています。その手掛かりを今度の事業でやっていきたいと考えております。

菅原：

ありがとうございました。ちょっとお尋ねしますが、市民活動としてそういう取組をしようと考えて、そのとき、例えば博物館に期待することというのは何かありますでしょうか。

真弓：

今、博物館のほうでも古い写真を集めてみえますので、そういう集め方のノウハウ、あるいは高

齢者の方に聞き取りをするノウハウ、それを資料化するノウハウをぜひとも指導していただければありがたい。高齢者に当時の子ども時代の思い出をしゃべってもらうわけですから、お一人3時間はかかるかなと思って行きます。それをどうまとめるかとか、そういう資料化についても指導をしていただければありがたいと思います。

菅原：

ありがとうございます。市民と博物館との連携の形ということもお話いただきました。

それで、今、連携ということになりましたが、このシンポジウムも三重県・三重大学連携というふうなことを言っております。一緒になって地域で必要とされるいろんな人の集まりの拠点、研究とか教育の拠点を作っていこうと考えているわけです。田川の石炭・歴史博物館と福岡県立大学が手を取り合って、結果として山本作兵衛の世界記憶遺産の成果が見られたということでございますが、この大学と博物館の連携ということについて、安蘇館長からちょっとお話しただけませんか。

安蘇：

組織的にどうかという問題はちょっとあるんですが、今回を契機に田川市のほうは、ようやく博物館単独ではもう持ち切れないということで、市を挙げての記憶遺産推進室を作ってくれました。ここが一つ柱になって、ようやく県立大という大きな組織との連携や話が進むということになったことを非常に喜んでおります。それまでは、言い方は悪いけど、私が窓口になって半官半民、私は嘱託職員で実は正式な職員ではないのですが、一応形は博物館長ですから、市を代表する形で県立大と連携する。世界記憶遺産に登録するのについては、その形でやってしまったわけですが。なった後はそうはいかないわけですね。これは田川市を挙げてどういうふう to これを受け止めきるかということになりますので、今、ようやく正式に30人委員会という、これからこれを進めていく委員会の中に、県立大も学長以下数名が入っていただいて、田川市も私もそれぞれ、先ほど言いました文化庁とか、あるいは国立博物館とか、大学の先生方を含めて、ようやくにしてこれがまとまった組織として、今ダイナミックに活動し始めたということで喜んでるところです。そういうふうな形に今後展開していくことで、今までの分が活かされたなというのが一つであります。

それから、もう一つ、今問われませんでした、写真の収集という点については、実は今急いでおりますのが、炭坑で現実に働かれた方が高齢化しております。一番若い人で77歳です。彼は三井田川伊田鉱が閉山直前に採用されたものですから若いわけですが、後は80代の中が普通です。この前、91歳の方に話していただく約束していましたが、いくら経っても連絡がないので、ちょっとお耳のほうが不自由なものですから、ファックスを何回も入れたら、ようやくその日、今日は都合があって行かれんということでありましたから、この方、行かれんぐらいの返事ができたけども、中にはもう入院して来られん人も出るわけですね。そういう中で今急いでおりますのが、月1回、これで5年目になりますが、月1回お一人ずつ、「炭坑の語り部」、炭坑を「やま」と読みますが、語り部ということでお話を伺って、私たちが知らないことをたくさん残してもらう努力をして、今、ようやくそれが2年分の印刷物になったわけですが、これを記録で残していくことが一つ。これも写真ももちろん入れるんですが、おなじように大事な作業だろうと思います。

それから、もう一つが、作兵衛さんと非常に懇意だった苅屋正士という人がおるんですが、作兵衛さんとの年齢差は27歳下でしたが、この方が亡くなったときに膨大な写真のフィルムが残ったわ

けですね。ここで大事なことは、ご本人がいなくなると、その写真が分からなくなるということです。全部うちがもらったんです。ところが、見出しにどこどこ炭坑を壊している様子とかを書いてくれてるものはいいんだけど、それでなかったら、ものすごいタンスいっぱいあるぐらいの写真のフィルムが使えないんですね。本人しか分からないわけです。そういう問題もありますので、先ほど出ておりますように、今のうちに説明してもらえうちに集めるということがどれほど大事かということを、しみじみ今私も味わっているところであります。以上2点だけ簡単に。

菅原：

ありがとうございました。大学と博物館の連携、資料の集め方、なぜ今やらなければいけないかということをご指摘いただいたわけです。

大学との連携ということでいいますと、やはり地元の三重大学がどうなんだということは、当然問いとしてございますので、これはフロアにいらっしゃる三重大学の塚本先生にコメントをいただきたいと思います。あと、資料の集め方の問題も、塚本先生、ご専門が歴史学でございますので、何かご意見ございましたらお願いしたいと思います。

塚本：

三重大学人文学部の塚本と申します。

博物館といいますと、どうしても著名な武将とか天皇家とか、あるいは著名な芸術家とか、そういった方たちの作品が文化財として扱われがちですが、そうではなくって、我々の直接の先祖、庶民が普通に暮らし働いていた、そういう痕跡に文化として光を与えられてきている。そういうことが今日の企画の一つの大きな意義としてあると思うんです。

今日の安蘇先生の基調講演で、一つのキーワードとして記憶の共有ということがあったかと思うんです。私は江戸時代が専門なんですが、江戸時代は300年ありますが、300年の間の初めの時期と終わりの時期と、基本的に働くあり方と生活のあり方は変わらないんですね。それがいつまで変わらないのか。先ほど菅原先生は、近代化というものの意味をかなり語られました。確かに文明開化とか産業化ということで変化はあるんです。おそらく江戸時代の記憶は、昭和初めぐらいまでは引き継がれていると思うんです。

私の先生は昭和初めの生まれで、その先生にとりましては、江戸時代というのは非常に身近な時代なんです。感覚的に分かる時代です。ところが、私はそうじゃない。その間に高度経済成長を挟んでいるから。

もう一つは、ここ10年ぐらいはIT化とか、グローバル化による第一次産業が衰退し、社会の変化が非常に大きいんです。その点で言いますと、現代というのは、記憶の共有が非常に難しくなっている。そういう時代じゃないかと思うんです。ですから、おそらく戦後に江戸時代のことをやるよりも、現代、戦前のこととか、昭和30年ぐらいまでのことをやることのほうが感覚的には難しくなっている。そういう時代じゃないかと思うんです。だからこそ、それを明らかにする意味があるし、価値があるし、必要がある。

今日の木下さんや久安さんのお話を聞きまして、特に三重県ではそういう資産に非常に恵まれて、それは明らかにしていく価値が十分にあるんだと分かるんですね。

ただ、次のこれからの課題ですが、安蘇先生のお話でかなり重要なポイントなんですが、文化財を価値付けするということにあったと思うんです。山本作兵衛の絵をご覧になって、これは記憶遺

産になるんだというアドバイスをされました。これは安蘇先生ご自身が、今日の午前中に四日市博物館を見て、これは世界遺産になるぞというサジェスションをいただいたことと同じです。そういう専門家の目がどうしても必要だと思うんですね。それを大学として本来はやるべきことじゃないかと思うんです。

それと同時にこういった活動の中核になるのは県立博物館だと思います。県立博物館としてそういう活動を価値付けする専門家が必要で、大学と博物館とが連携をして市民活動をバックアップしていく。そうしますと、今日の課題にありますような三重の近代史から地域の明日を考えていく活動に展開できるのではないかと。これは今回のシンポジウムを機会にして、博物館と大学がこれから考えていかなきゃいけない課題じゃないかと思っています。

菅原：

ありがとうございました。博物館のあり方についてもいろんなご意見が今までの中で出てきたわけでございます。

ここで布谷館長に今までのご発言をどのように受け止めるのかお話いただければと思います。

布谷：

ありがとうございます。今日のスタートから県立博物館がこういうふうなものであれと、こういうふうな活動をしていってほしいというような、一種期待も含めいろいろ方向性やご指導をいただいたような気がします。

個々の質問にお答えするのはなかなか難しいですが、元々博物館は基本的な地域の資料をきちんと持っていて、それを研究し、使えるように情報発信するはずだと思いますが、今日の話というのは、それを一体誰が使うのかという話になっていくのかと思います。私たちは博物館が資料を持っていたとしても、それを使ってもらえなければ意味がないというように思います。それを使うのは地域の方だと思うんですが、これまで日本の博物館があまりうまく利用されてこなかったのは、使えるようにしていると言いながら、使い方が分からなかったり、俗に言う敷居が高かったり、非常に分かりにくかったりということがたくさんあったからです。これだけ便利で楽しくておもしろい施設であるのに、使われてこなかったという現実があります。博物館は学ぶ場であって、学ぶ場というのは、地域のことを学ぶことにあります。それを通して地域を知って、あるいは、その地域のいろんなおもしろさを知る中で、地域をまたよくしていく。そういうことが博物館の有り様だと思っています。おそらく待っていても使ってもらえる場にはなりません。いかにうまく使ってもらおうかというのは、例えば今日はサポートスタッフの木下さんが一つのお話をしていただきましたが、そういう活動を通して地域につながっていく。あるいは、四日市のまちかど博物館のお話をいただきましたが、あるいはいくつかの活動をお聞きしましたが、そういうようないろんな活動を地域でされていますから、博物館自身が地域へ行って博物館の資料を提示して、より地域の人と一緒に活動するという使いやすさみたいなことを分かるようにしていくことが大切です。実際には県立博物館はそんなスタッフはたくさんいませんので、期待していただくことがすべてできるとは思いませんが、今申しあげたように博物館自身が地域の人と一緒に活動することで、本来、博物館が挙げている人づくり、地域づくりが実現できるような博物館でありたいというふうに思っています。なんとかそういうこ

とが実現できるような博物館をつくりたい、という思いだけをとりあえず申しあげたいと思います。ありがとうございます。

菅原：

ありがとうございました。予定の時間を若干過ぎておりますが、最後に各パネラーの方から、最後にこれは言っておきたいということを、ございましたら簡単にお願ひできればと思います。それでは、安蘇館長のほうから。

安蘇：

それでは、一言で言います。先ほどの資料の山本作兵衛コレクションの次のページを一言申しあげます。実は、まず先ほどから出ておりますように、一番大事なのは、市民、住民の人たちに広く受け入れてもらうことです。そのために田川市で広報誌がありますが、今度のMO W・記憶遺産とは何ぞやという特集を組みまして、8ページ立てで1回出しましたが、今続けて出したのが、その次にある山本作兵衛コレクション展という、いわば「広報たがわ」の下の方にある1322号であります。これは裏表2ページになっておりますが、何を出しているかというと、絵をどういうふうに見たらいいのかという具体的な市民に分かりやすい情報を出さないと、見に来い見に来いと言ったって、よう分からんばいということになると思いますから、そういう意味でちょうど4枚の絵を取り上げて、皆さん方にも読んでいただくように今日は入れさせていただきましたが、こういう形で市民に広くまず知ってもらうこと。そして、とにかくわずか5万ちょっとしかいない市民の中で、まだ博物館に来てない人のほうが半分ぐらいおるわけですから、よそから来てもらう前に市民が味わう博物館になってもらうということで、今とりあえずはいろいろとやっておるということで、簡単ですが、そういうことで後は資料を見てください。

吉村：

一言ということで、博物館という言葉について一言申し上げたいのですが、先ほど問題提起の中でもおっしゃいましたように、明治のころの博物館というのは博覧会と大きな関係があります。私の説明した明治11年の三重県最初に開かれた物産博覧会では、会場の建物一つを残して、それを博物館と称して県が予算を付けた、博物館費なのですね。明治12年の予算ですが、それがやがて明治18年には物産陳列場になり、勸業施設として使っていくのです。博物館の中に、単なる文化財的なものだけではなくて、やはり、そういった企業のいろんなものを含めて保存すべきであると思います。例えば、企業資料についても、企業アーカイブスとして企業でちゃんと保存されているところはいいいですが、できるだけ引き取ってもらう必要があります。公文書館機能として、個人の持っている古文書や資料も引き取ると所蔵庫がいくつあっても足りないのじゃないかと言われますが、やはり、十分な収蔵機能を持たないといけないのではないかと思います。

なお、ついでのなのですが、明治～大正期に四日市製紙という会社がありました。四日市の本社にあった工場が明治30年に焼けてしまって、工場は富士山麓の現在の富士宮市、旧芝川町に移りました。その後、富士製紙・王子製紙など会社名は度々変遷しますが、その倉庫に資料調査に行きました。そうしたら、四日市製紙会社の資料がずらっと並んでいるのですね。社

史を作ったときの資料が整然と整理されていました。そういう企業があるのです。だから、図書館にも申し上げなければいかなのですが、三重県関係の社史はすべて集めるべきだろうというふうに常々考えております。

木下：

私のサポートスタッフ活動は6年目に入ります。そこで気付きましたのは、たとえば博物館が津市にある器として、地域の人々がそれぞれ点とすれば、私達はアメーバーみたいにその点と器を繋ぐ線になっていくのだろうと自分では思っています。そういう気持ちで活動をしていると、地域にはたくさんの情報や大変価値のあるものが眠っているんですね。ところが、地域の人はそれが大切なものであると気が付いていないのです。価値があると認識していないのです。先日、古写真を見せていただきに知人宅へお邪魔したのです。ご当人は「実はもう燃やそうと思っていたところなんや」言われます。見せていただくと大正、昭和初期の民俗的に価値があると思われる写真がたくさんあるんです。博物館サイドから見ると価値があり大切なものなのですが所有者の方は気づいている人もあると思うのですが、気づいていない人も多いと思いました。なかには「土蔵の隅にこんなのあったよと。家を建て替えるのでそろそろ捨てようと思っていたんだ」という方もあります。

物の価値というか、こういう歴史的文化的なものが大切なんだというようなことを地域の人に気付いてもらうことも一つの仕事じゃないかと思います。

それから、何が何でも博物館へすべて集めようとするのも物理的にも無理な面もあることは分かります。現在、博物館には28万点あるとおっしゃいましたが、公文書館資料を含めるとおそらく40万点ぐらいになるのですね。そこで地域の所有者の方がその物をどのようにして保存していただいたらよいか等をアドバイスできるようにしていく必要があるんじゃないかというのを、この5年間の活動で痛切に感じています。

久安：

私、二十歳ぐらいのとき海辺で寝そべっているときに、文化って何かなというのがふと閃いたということがありまして、それは人間がもし死というものが無ければ、どんどんいろんな経験を身につけて、どんどん成長して行って、すべて知恵として身につけて行って、それならば、別に文化も要らないかなと思ったんだけど、やっぱり人間は死ぬということで、そのために残していく知恵として、人類の知恵として文化がいるのかな、というふうに、脈絡もなくそういうのを思ったことがありまして、まちかど博物館、いまいろいろ活動しているわけですが、それはネットワークができましたといっても、それ自体が別に意味があることではなくて、いまはまだ、それを知ってもらう段階です。いろんなつながりが、いろいろなかたちで、いろんなものに派生して行って、連鎖反応を起こして、そういうのを期待しているわけで、いろんな者が知恵を出し合ってつながっていけばというふうに思っていますので、そこで県立博物館なんかがそういう中核的な施設になっていただければありがたいと思っています。

菅原：

ありがとうございました。今日は三重の近代史から地域の明日を探るというテーマでございます。地域の明日を探る、明日を考えると言うべきですね、そのときに博物館が重要なよりど

ころになってほしいということでの企画でございました。そのとき博物館は貴重なものを展示するとか保存するとか、行けば教養が高まるというような役割を担うということ以上に、やはり地域のことを考える人にいろいろ刺激を与える。役に立つ材料を提供することができるという役割が非常に重視されてくるように思います。布谷館長からは博物館が地域に出て行く、地域の人と一緒に活動していくというお話をいただきましたが、逆に地域の側から言いますと、受身になって博物館が何かしてくれることを待っているということではなく、お互いが主体になってやっていく関係が必要ではないかと思いました。ですから、今日のキーワードの一つは、久安さんがお話になったつながり、博物館を媒体にしていろんな人や機関がつながっていく、いろんな活動がつながっていく、新しいものができていくという関係なのかなと思いました。

これから博物館がオープンするまでは、まだ数年かかります。長いようでもありますし、短いようでもあります。本当に我々が必要としている博物館をつくっていく。そして、その活動が地域の中に定着していくために、今日のいろんな発言が生きてくることがあればと思っているわけでございます。

今日は天気の良い中を長時間にわたりまして皆様にご参加をいただきました。ありがとうございました。これをもちまして、このシンポジウムを閉じさせていただきます。

進行：

菅原先生、パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。今一度、盛大な拍手をお願いいたします。

資 料

基調講演 「世界記憶遺産 山本作兵衛炭坑記録画について
～田川市石炭・歴史博物館の取組～博物館で学びが起るとき」・・・45

問題提起 「地域の価値を明日に伝える」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

事例報告1 「三重の近代史から地域の資産を考える
～明治期の博覧会関係文書から～」・・・54

事例報告2 「博物館に関わる市民や県民の立場からの取組
～三重の軽便鉄道 廃線の痕跡調査～」・・・56

事例報告3 「四日市市で地域資産を活用する取組
～たいせつな「つながり」～」・・・58

シンポジウム内容に関連したパネル展示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

三重県・三重大学連携
新博物館シンポジウム
三重の近代史から
地域の明日を探る

四日市市総合会館 8階視聴覚センター視聴覚室
三重県四日市市隣町2-2 近鉄・JR四日市駅下車徒歩約8分
平成23年 11月19日(土) 13:30～16:30 受付12:30～

入場無料
募集人数
220名

基調講演 「世界記憶遺産 山本作兵衛炭坑記録画について
～田川市石炭・歴史博物館の取組」
安藤 健生さん
(徳島県 田川市石炭・歴史博物館館長)

問題提起 「地域の価値を明日に伝える」
菅原 正一さん
(三重大学工学部工学研究科経済学専攻教授)

事例報告 三重の近代史から地域の資産を考える
菅原 正一さん
(三重大学工学部工学研究科経済学専攻教授)
山本 作兵衛炭坑記録画(複製)
田川市石炭・歴史博物館蔵

三重県立博物館サポートスタッフ後援グループメンバー)
四日市市で地域資産を活用する取組
久松 昌之さん
(三重県立博物館)

パネルディスカッション
三重の近代史から地域の明日を探る
コーディネーター 菅原 正一さん
パネリスト 安藤 健生さん 吉村 利明さん
水戸 正太郎さん 久松 昌之さん

会場内でのパネル展示
山本 作兵衛炭坑記録画(複製) 田川市石炭・歴史博物館蔵
山本 作兵衛炭坑記録画(複製) 田川市石炭・歴史博物館蔵
山本 作兵衛炭坑記録画(複製) 田川市石炭・歴史博物館蔵
山本 作兵衛炭坑記録画(複製) 田川市石炭・歴史博物館蔵

主催 三重県・三重大学
後援 四日市市・四日市市議会、四日市市商工会議、三重県博物館協会

明治以降、三重県には、醸造、製糸、紡績、窯業、鋳造などの様々な産業が発達し、港や鉄道、道路網が整備されてきました。とりわけ四日市地域は、中部地方の産業が近代化をはたしていく上で、のけん引役になってきました。現在、これらの施設や技術の中には役目を終え、消え去ろうとしているものもあります。しかし、その歴史的価値を再認識することで、これらは地域の遺産として、地域づくりに活かせる大きな可能性を持つものとなります。

本シンポジウムでは、地域の再生にむけた取組の基礎となる遺産の価値を的確に捉えることにより、これを資産として活かしていくための議論と展望を探ります。

基調講演者プロフィール

安藤 健生(あす たつお)さん 田川市石炭・歴史博物館館長
昭和35年の高校で教壇に立つ。郷土の歴史を研究。1960年代に山本作兵衛炭坑記録画に出会う。平成18年(2006年)から田川市石炭・歴史博物館館長に就任。明治以降の近代化や戦後の復興を支えながら高度で失われた近代の遺産を人々の記憶にとどめたいという思いを持ち、地元大学と連携して、山本作兵衛炭坑記録画の世界記憶遺産への日本初の登録に成功。

山本 作兵衛(1892年～1994年)は、徳島県徳島市出身。7歳の頃から四日市に入り、山本家の炭坑の経営にからみながら炭坑主として働く。昭和33年(1958年)「ヤマの炭」を創設して独立し、経営に専らになる。昭和34年から昭和35年にかけての炭坑労働争議の解決の機を1960年代に訪ねる。昭和35年(1960年)5月、日本炭坑労働者科学文化機関(日本炭坑労文研)に、日本初として登録される。

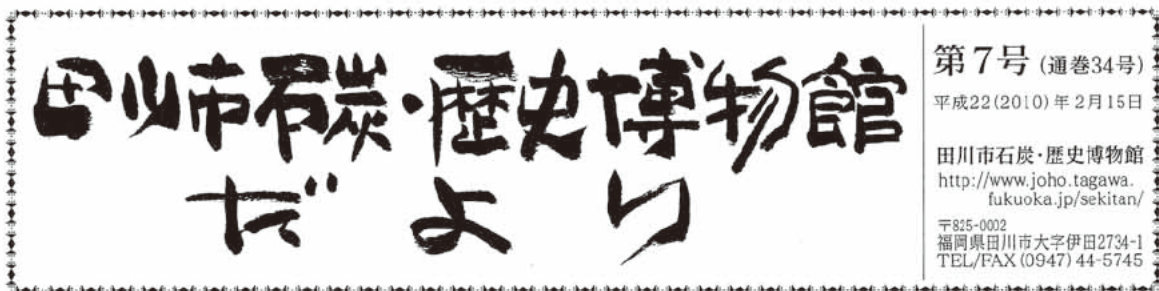
★シンポジウム申し込み方法★
下記申込み欄の必要事項を記入の上、FAX、郵送、Eメールで「シンポジウム参加希望」として、お申し込みください。いただいた個人情報は、今後の新博物館に関する行事等の案内連絡(希望された場合)以外には使用しません。なお、当日、空席がある場合は、事前申込みがなくても参加いただけます。

申込み締め切り 11月11日(金)
問い合わせ・申込み先
三重県生活・文化部 新博物館整備推進室
〒514-0006 津市広明町147-2 三重県立博物館内
TEL: 059-228-2283 / FAX: 059-229-8310
E-mail: shinhaku@pref.mie.jp
詳しくは新県立博物館のホームページからご覧いただけます。
http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/

～切り取り線～

新博物館シンポジウム参加申込欄

お名前	申し込み人数
ご住所	新県立博物館に関する行事の案内 希望する / 希望しない
ご連絡先(電話番号)	Eメール



世界文化遺産登録の取り組みから学んだこと、考えたこと

安 蘊 龍 生

はじめに

「九州・山口の近代化産業遺産群」というテーマの世界文化遺産登録への活動が本格的にはじまった年は、平成18年度であった。以下、その活動を通して学んだこと、考えたことなどを振り返ってみたい。

1) 平成18年度の動向と取り組みへの胎動

平成18年6月、第127回九州知事会議において、近代化産業遺産の世界遺産としての活用を政策連合として取り組むことが決定され、九州近代化産業遺産の調査と再評価を行う「九州近代化産業遺産研究委員会(以下「研究委員会」と略す)」が10月に成立した。なお、この年の9月15日、文化庁は、今後、地方自治体からの提案をもとに世界文化遺産暫定一覧表へ追加する案件の選定を行う方針を決定している。

平成18年11月14日、研究委員会は九州・山口6県8市で13ヶ所の候補リストを決定。同27日、6県8市は文化庁に対し、「九州・山口の近代化産業遺産群」を共同提案した。

2) 田川市において緊急住民決起集会を開催

この6県8市13ヶ所(福岡県内は、官営八幡製鐵所東田第一高炉跡と三井三池炭鉱宮原坑施設)の共同提案書で「資産に含まれる文化財」の欄外備考に「この他にも、筑豊炭鉱等の石炭関連遺産群(旧三井田川鉱業所伊田竪坑槽・同二本煙突)(以下「二つの資産」と略す)、志免鉱業所(竪坑槽等)、炭鉱関連住居(伊藤伝右衛門邸等)、港湾施設について、今後類例を検討することが必要である」と記されていた。

これを見た筆者の歴史認識は、筑豊産炭地の存在こそ官営八幡製鐵所の重要な立地条件に当たるといった思いが強く、「製鐵所東田第一高炉跡」が候補に入るなら、「二つの資産」も候補に入るのが当然と判断をした。

そこで平成18年12月23日、福岡県立大学(以下「県

大」と略す)にて「世界遺産登録をめざして!竪坑槽と大煙突を後世に伝える会」と題し、田川地区の有志によって緊急住民決起集会を開催した。わずか一ヶ月の間の準備で、約200名が参集する熱気溢れる集会となった。この時、基調講演者に招聘したのが加藤康子氏(都市経済評論家)で、これをご縁として、以後の世界遺産活動に関する調査やシンポジウム開催や打ち合わせ等で田川には十数回足を運んでもらうことになった。

なお、緊急住民集会の段階では、文化庁に共同提案された13ヶ所の遺産に田川市の二つの資産を追加してもらうことを当面の目標としていた。しかし、平成19年1月23日、文化審議会及び世界文化遺産特別委員会における調査結果が発表され、6県8市の共同提案は継続審議となった。これに伴い、平成19年度は、田川市は研究委員会のオブザーバーとして会議に参加して、共同提案に加わる取り組みに入った。

3) 「伝える会」の結成と他地区との連携

この緊急住民集会を契機として、田川地区では田川地区産業遺産を未来に伝える会(以下「伝える会」と略す)が平成19年2月20日に結成された。会長・副会長(共同代表)及び会員は産・官・学・民を結集した組織であり、ユネスコ世界遺産暫定リスト入りを目指すなどを活動内容とした。平成19年2月3日世界遺産萩シンポジウムに参加、同3月11日九州伝承遺産ネットワークシンポジウム(長崎市)に参加し、九州伝承遺産ネットワーク加入と連携。平成19年2月24日、近畿大学産業理工学部(飯塚市)で開催された「旧伊藤伝右衛門邸開館記念・石炭文化遺産を未来につなぐシンポジウム」に参加など、他地域の同種の取り組みへの参加や連携を深める取り組みも進めた。また、伝える会は、田川地区でも炭坑節まつりでの展示コーナー設置や田川市役所や博物館での宣伝幕設置など、地域・市民への啓発にも努めた。

平成19年11月6日、第4回研究委員会は、「世界文化遺産国内暫定一覧表への追加検討書」に本市の二つの資産を正式記載。同12月、6県11市は22件の候補提案書を文化庁に共同で再提案した。

4) 世界遺産田川シンポジウム開催

平成20年2月3日、県大講堂で「世界遺産田川シンポジウム」を開催。基調講演スチュアート・スミス氏、コーディネーター加藤康子氏、パネリストは佐々木克之氏(鹿児島県企画課長)、田村省三氏(尚古集成館館長)、永吉 守氏(大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ理事)、市原猛志氏(九州産業考古学会)、と筆者の5人。

平成20年9月26日、文化庁は本資産群を「世界遺産暫定一覧表」に記載することを決定。これを受けて平成20年10月、「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会が発足した(略称「推進協議会」)。会長は鹿児島県知事、委員に各知事・市長(6県11市)。海外専門家委員9名、国内専門家委員7名を委嘱。コーディネーターに加藤康子氏。平成21年1月には、ユネスコで「九州・山口の近代化産業遺産群」が暫定一覧表に正式に記載された。

5) 推進協議会の活動

平成21年1月12日、推進協議会主催で「世界遺産鹿児島県シンポジウム」(同13日、第1回専門家委員会)開催後、翌月15日に「世界遺産田川国際シンポジウム」を田川市で開催した。このシンポジウムは県大の「世界遺産をめざす旧産炭地田川再生事業」の一環として実施されたが、結果として田川地区をあげての総力的な実践となり、1200名が参集する盛大な会となった。海外専門家委員からはスチュアート・スミス氏、ディヌ・ブナル氏、イアン・スチュアート氏がパネラーとして登壇、同委員のバリー・ギャンブル氏とマイケル・ピアソン氏は会場に控えるという布陣。国内専門家委員は岡田保良氏、地元の筆者もパネラーとなり、



海外専門家委員による田川市の調査(三井田川霊園)

加藤康子氏はコーディネーターを務めた。会場を埋め尽くした参加者は、フィナーレの炭坑節総踊りまで参加した。また、壇上では、海外専門家委員の方々も田川市の法被を着て、一緒に炭坑節を踊った。

平成21年2月20日、第2回専門家委員会(北九州市)、平成21年4月28日、第3回専門家委員会(長崎市)を経て、平成21年8月6日、推進協議会総会で佐賀市の参加加入が承認された(6県12市となる)。この間に、ギャンブル氏とピアソン氏は、加藤康子氏ともども数回に渉り、筑豊の炭鉱関連の資産をくまなく視察した。あわせて専門家委員会では、各地の資産を視察して総合的に検討し、候補の追加や削除など、緻密な議論と作業を遂行した。特に北九州市、長崎市の専門家委員会では、筑豊についての評価や扱い方に多くの時間が費やされた。

6) 第4回専門家委員会の提言書

平成21年10月19~21日、東京での第4回専門家委員会は、提言書の内容確定の会議であった。今回の提言書は「九州・山口の近代化産業遺産群」の世界遺産登録に向けて、専門家委員会の専門的見地に基づく評価をまとめたものである。本テーマは、ユネスコ世界遺産委員会が定める「世界遺産条約履行のための作業指針」(ii)(iii)(iv)に該当し、顕著な普遍的価値を有すると理論付けられた。あわせて、構成資産を典型的なコンセプトから地域的(8エリア)にグルーピングした。構成資産は、これまでの22ヶ所から7ヶ所を削除し、新しく13ヶ所を加えて、合計28ヶ所とした。

この段階で、田川市の二つの資産を含む筑豊炭田関連資産は、残存状況が悪く拡散しているため、評価基準に合致せず、残念ながら構成資産にはならなかった。しかし、提言書の中では以下のように構成資産並みに重要視された記述となっている。

7) 提言書に見る「筑豊田川」の記述(筑豊炭田のみ抜粋)



世界遺産田川国際シンポジウム(平成21年2月15日)

【2.b歴史と発展/(iii)西洋技術の積極的導入/テーマサマリー:炭鉱/(高島と端島・三池炭鉱に続いて)筑豊炭田】「…筑豊炭田は日本最大であり、1880年代に急速に近代化した。…1880年、目尾炭鉱で初めて蒸気ポンプの試用に成功して機械化が進み、筑豊の近代化が始まった。…1905～1910年には日本の三大堅坑のひとつと言われた伊田堅坑が開削された。伊田堅坑は筑豊炭田の中では最も大きく、三井田川鉱業の主要なものであった。」

【3登録の価値証明/3.a価値基準への適合性証明/筑豊炭田】

「20世紀の初頭、日本で最も大きな炭田に成長した筑豊炭田で、三井田川鉱山は顕著な位置をしめている。伊田堅坑の遺構は1905～1910年に開削されたものだが、日本の三大堅坑(何れも筑豊)と称され、田川市石炭記念公園を見下ろす当時の堅坑槽と赤レンガの二本煙突により構成される。これらの象徴的な二本煙突は、1910年伊田堅坑で生まれ、日本で最も愛されている民謡、炭坑節の中でも「あまり煙突が高いので、さぞやお月さん煙たかろ」と謡われ、永遠に語り継がれている。こうした無形文化遺産は大きな意味でコミュニティのアイデンティティやプライドの基盤になっている。山本作兵衛の炭鉱絵画は炭鉱のコミュニティの生活の全ての様相を描写する日本における炭鉱記録画の代表作である。同氏の特出したコレクションは現在田川市石炭・歴史博物館に保管され、ユネスコの世界の史料遺産(Memory of the World)への申請が田川市を中心として検討されている。…筑豊にはおびただしい数の炭鉱の神社や強制労働の墓が残されている。中でも、



専門家委員による炭坑節と炭坑記録画の調査(博物館)

田川市石炭記念公園並びに三井田川鉱業所伊田霊園には近隣アジア諸国を含む外国人強制労働者や無縁仏の墓や記念碑が祀られている。名前のない炭坑夫の何百もの墓が生い茂る草に覆われた山間に存在し、それらは文

化的意義という面で、国際的な関心を呼ぶであろう。」

【5資産の保護管理状況/5.h観光情報(見学者用の施設と観光統計):世界遺産の歴史や意義を説明する博物館やヘリテージセンター】

「田川市石炭・歴史博物館、伊田堅坑の記念公園は、世界遺産の範囲以外の主要なアトラクションのカテゴリーに入る。筑豊・田川及び他の福岡県の資産は、ビジター管理優先順位・ビジターの世界遺産への活動の中で、特に注目される。」

【7資料/7.d資産管理機関住所(目録、記録、アーカイブ保管住所)】

「山本作兵衛の炭鉱記録画集は真実性を証明するのに重要だけでなく、インタープリテーション(解説)のためにもっとも優れた基本情報となる。さらなる文書、計画、技術的及び社会的炭鉱社会の所産が当博物館並びに展示解説施設に保管されている。」

8) 今後の諸課題について

まず、今回の世界遺産候補への地域をあげた取り組みは、結果として構成資産候補としては認められなかった。しかし、二つの資産は、7)項で引用しているように、関連資産として、重要な位置づけをされている。取り組み遂行の中、二つの資産の価値を再確認する機会になった。

特に、将来、世界文化遺産登録が実現した段階では、ビジターにとっても外すことは出来ない重要な関連資産として関心を持たれることは確実である。したがって、今後は、二つの資産を含む石炭記念公園(伊田坑跡)が国の史跡指定を受け、将来の保存活用への足掛かりを固める取り組みを継続すべきである。そのために必要な資料調査や発掘調査等も遂行したい。また、各地の近代化遺産の取り組みとも連携を深め、お互いの課題への克服のため可能な限りの共同研究を進めていきたい。特に、今回学習できた世界文化遺産の歴史的な意義についてを踏まえつつ、本博物館の本来の任務をこれまで以上に適切に果す重要性が増した点でも自覚を深めることができた。

また、近代化産業遺産の中で、産炭地として筑豊全体の重要性をこれまで以上に深く認識できた。そのことを基盤として、筑豊近代遺産研究会に依拠しつつ、既存の出版活動に加えて、「筑豊シンポジウム(仮称)」などを開催し、一体化した活動を希求することも必要と思慮する。なお、その際の「筑豊」の範囲は、遠賀川流域全体と洞海湾を中心とする旧遠賀郡も当然その範疇とすべきであろう。

(あそ たつお・田川市石炭・歴史博物館館長)

山本作兵衛炭坑画

田川市石炭・歴史博物館所蔵の山本作兵衛炭坑画 585 点と日記類 42 点、福岡県立大学保管の炭坑画 4 点日記類 66 点(計 697 点)が日本で初めて世界記憶遺産に登録されました

世界記憶遺産(Memory of the World)とは

世界遺産〈不動産対象〉、無形文化遺産〈人類口伝及び無形遺産傑作〉と並び、ユネスコ主催の三大遺産事業のひとつで、失われていく歴史的記録遺産を最新の技術を駆使して保全し、研究者や一般人に広く公開することを目的とした事業です

申請の経緯

田川市は当初「九州・山口の近代化産業遺産群」の関連資産として、旧三井田川伊田坑竪坑櫓(やぐら)と二本煙突の世界遺産登録を目指していました。海外の専門家委員が来館・視察の際、作兵衛画を鑑賞し、世界記憶遺産への申請を勧められました。

作兵衛画選定理由と評価ポイント

山本作兵衛の作品群は、産業革命に直面していた筑豊の炭坑で実際に働いていた一坑夫の体験に基づくものであること、世界史にとって重要な時代の記録としては非常にまれな、政府や企業が残した公のものではなく、まったく個人的な記録であること、当時の風習や生活も記録されていることなどが評価されました。

作兵衛画について

作兵衛氏は 14 歳から坑内に入り、採炭夫や鍛冶工として筑豊各地の中小炭坑で 63 歳まで働きました。宿直警備員になった 65 歳から、戦死した長男への想いを紛らわすために広告の裏などに炭坑の絵を描くようになります。66 歳からは書き溜めた日記などを基に画用紙と墨で描きはじめました。その後、すすめがあり彩色するようになりました。作兵衛氏は鍛冶工をしていたこともあるため絵は緻密で、余白に書き込まれた解説文が記録性を一層増しています。坑内・坑外の労働の様子以外に炭坑でのしきたりや日常生活・来訪者・遊びなど 92 歳まで描き続けました。

基調講演

世界記憶遺産に登録された「山本作兵衛コレクション」(博物館所蔵分)を展示します。当企画展では、下記の4テーマにわけて、原画を30点ずつ特別公開します。

第1部

「山本作兵衛コレクション」

(博物館で作成した絵葉書の題材となった原画)
9月17日(土)～10月16日(日)

第2部

「坑内労働/ヤマの暮らし」

10月18日(火)～11月13日(日)

第3部

「運搬/縁起・迷信・禁忌」

11月15日(火)～12月11日(日)

第4部

「ヤマの仕事/米騒動」

12月13日(火)～1月9日(月・祝)

平成23年

平成24年

9月17日(土)・1月9日(月・祝)

休館日●●月曜日・月曜日が祝日の場合は
開館し、その翌日が休館
●12/31、1/1

開館時間●9:30～17:30(入館は17時まで)

会場●田川市石炭・歴史博物館 第2展示室

観覧料●一般 210(150)円

高校生 100(70)円

小中学生 50(30)円

※()内は20名以上の団体料金

主催●田川市・田川市教育委員会

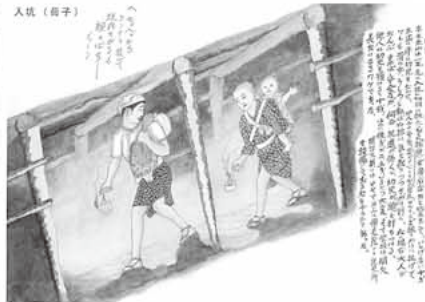
後援●日本ユネスコ国内委員会、福岡県、福岡県教育委員会
「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会
朝日新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、読売新聞社
NHK北九州放送局、FBS福岡放送、テレビ西日本
九州朝日放送、RKB毎日放送、TVQ九州放送

田川市石炭・歴史博物館

福岡県田川市大字伊田2734番地1(石炭記念公園内)
TEL/FAX 0947・44・5745



人坑(荷子)



朝の坑夫





山本作兵衛氏（横本勝氏撮影）

これを記念して、田川市石炭・歴史博物館では、世界記憶遺産に登録された697点のうち、同館が所蔵する627点の資料群の中から、炭坑記録画の原画などの貴重な遺産を特別公開します。

世界史的にも意義深い日本の近代化で、重要な役割を果たした筑豊炭田。そのヤマの記憶を、炭坑労働者だった山本作兵衛氏は、炭坑記録画や日記等によって詳細に記録しています。一個人の視点によるこれらの記録は、個人の記憶にとどまらない社会集団の記憶を具現化したものであり、共有する記憶として世界的に高い評価を受けています。

田川市と福岡県立大学が共同で申請した「山本作兵衛コレクション」697点が、平成23年5月25日、日本初のユネスコ世界記憶遺産に登録されました。

山本作兵衛

コレクション展

世界記憶遺産登録記念
原画特別公開



炭坑での作業（横本勝）



炭坑（横本）



面なれ



炭坑 新巻機

会期中、協賛事業として、田川市内の中村美術館（山本作兵衛炭坑記録画原画：個人蔵）・田川ごとうじ銀天街と伊田商店街でも展示予定です。

Map

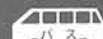


交通案内

◆ 福岡方面から ◆



「JR 博多駅」より福北ゆたか線で「直方駅」下車、平成筑豊鉄道に乗り換え「田川伊田駅」下車、徒歩10分。



「西鉄天神バスセンター」より西鉄バス「特急 田川後藤寺・伊田」行き「日の出町口」下車、徒歩5分。

◆ 北九州方面から ◆



「JR 小倉駅」より日田彦山線で「田川伊田駅」下車、徒歩10分。



「小倉駅バスセンター」より西鉄バス「快速・田川後藤寺」行き「日の出町口」下車、徒歩5分。

田川市石炭・歴史博物館

〒825-0002 福岡県田川市大字伊田 2734 番地 1（石炭記念公園内）
TEL / FAX 0947-44-5745 E-mail tchm@lg.city.tagawa.fukuoka.jp
HP [田川市石炭・歴史博物館](#) で [検索](#) をクリック

山本兵衛 コレクション展

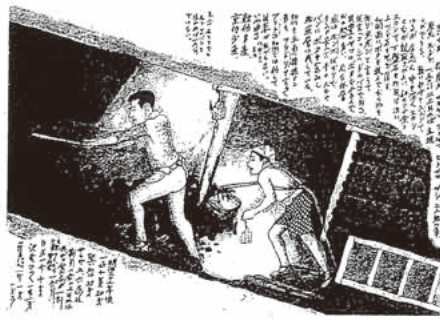
ユネスコ(国際教育科学文化機関)の三大遺産事業のひとつである世界記憶遺産(メモリー・オブ・ザ・ワールド)に登録されたことを記念して世界記憶遺産に登録された697点のうち石炭・歴史博物館が所蔵する627点の資料群から、炭坑記録画(水彩画・墨画)の原画などを石炭・歴史博物館で特別公開しています。今回の企画展では、4部に分けそれぞれテーマを設定し、原画を30点ずつ公開しています。

平成24年1月9日(月・祝)まで

9月17日から10月16日まで行われていた第1部では、同館で作成した絵はがきの題材となった原画を展示しました。また、現在行われている第2部では、「坑内労働／ヤマの暮らし」というテーマに沿った原画を展示しています。

そこで、これまで展示されたものから4点の原画とその画中文章の現代語訳を紹介いたします。なお、原画のタイトルについては「炭坑の語り部 山本兵衛の世界」田川市石炭・歴史博物館／田川市美術館編2011年(第二版)によります。

○第1部展示作品より 【立ち掘り】



画中文章の現代語訳
「明治中期の採炭夫。先山・後山一先(先山1人と後山1人の2人1組・サシ(2人1組、二人組の事。炭文(スミタケ)が1、50m以上あれば、立ち掘りができる。軟らかい部分を透かして掘るが、なるべく中を深く透かしこむほうが段取りがよい。60センチ余り透かして、下は盤石を打ち上げ、次には上はツリ石を叩き落とす。切羽面にボタを扶けないのをキリタオシと言って、坑主(炭坑経営者)のドル箱である。筑豊のヤマは、ボタを含んでいる所が多い。もともと、低層炭はホンスばかりであるが、量は少ない。昔は天井や盤にボタを含んだ粉炭層は残っていた。切羽を平面に採掘することをツラドリと言って、アラトコ切羽では、能率が上がらない。いわゆる軽働多産・重働少産で、巧拙(上手下手)の差はとても大きい。先山は右ききでも、左でツルバシを使わねば一人前ではない。明治32年頃、一箇切實20銭、堅い所は25銭だった。サシ(2人1組)で5、6両位。勘引が2合以上。あがり賃(奨励金)が1割つくから1合引き(見込出炭)となる。白米1升10銭、沢庵(コンコン)1本1銭、サツマイモ1斤

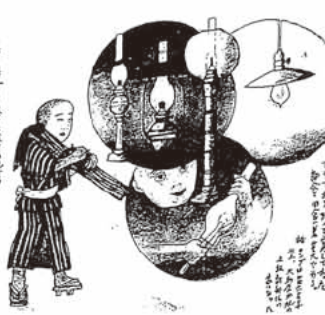
【ヤマの米騒動4 (警官総動員)】



画中文章の現代語訳
「大正7年8月17日より(新聞では数軒荒らしたと報じていた)。(ヤマの売店だけのことで、町の商店を襲ったのは自分には知らない)警官は総動員で鎮撫に当たった

たが、抜かないサーベルにはその威力も発揮できず。否、暴虎馮河の勇にはやはり暴徒の火の手は、ますます燃えさかるばかり。巡査は、飯はくわねーかやつつけろーと奇声をあげる。」「
※6 暴虎馮河：血気にはやり、成功することのない冒険をすること

○第2部展示作品より 【ツルバシ運びランプの掃除】



画中文章の現代語訳
「大手のヤマは知らないが、明治41年初夏の頃、K坑(麻生上三緒坑)に電灯がついた。麻生系の炭坑では初めてで、皆喜んだ。まして子どもは踊って喜んだ。それは、苦手なランブ掃除から解放さ

山本作兵衛
コレクション展
オープニングセレモニー

9月17日、山本作兵衛コレク

ション展の開催を記念して、石炭・歴史博物館でオープニングセレモニーが開催されました。

このオープニングセレモニーには伊藤信勝市長を始め、小川洋福岡県知事、名和田新福岡県立大学学長、高瀬春美田川市議会議長のほか、山本家を代表して、作兵衛さんの孫である緒方恵美さんが出席しました。

伊藤市長、小川知事のあいさつの後、出席者によるテープカットを行い、コレクション展の開催を祝いました。



▲テープカットで開催を祝いました

世界中に発信を

市では、世界記憶遺産登録を受け、国内はもとより世界中に山本作兵衛氏の作品を発信するため、8月29日から専川WEBサイトを公開しました。このサイトでは、世界記憶遺産

第1回山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等検討委員会開催

9月15日、第1回山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等検討委員会が開催されました。

この会議の中で、当検討委員会の会長に有馬学九州大学名誉教授を、副会長に三輪嘉六九州国立博物館長と栗原祐司文化庁文化財部美術学芸課長を選出し、その後、委員間で意見交換を行いました。

今後は分野別の部会で議論を重ねながら、保存や活用などに向けての有効策を検討していきます。

また、本市では、10月6日付けで総務部総合政策課内に「世界記憶遺産推進室」を設置し、世界記憶遺産の保存と活用などにむけた体制を強化しています。



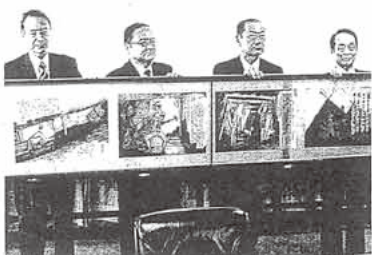
▲会長に選出された有馬教授（中）

日本コークス工業が作兵衛氏の実原画10点を寄贈

9月28日、日本コークス工業（東京、旧三井鉱山）の西尾仁見社長らが田川市役所を訪れ、山本作兵衛氏の実原画10点を寄贈しました。

この原画は、かつて市内にあった旧三井鉱山田川鉱業所の迎賓館であった「百門坂倶楽部」に飾られていたもので、1974年～75年に描かれたものです。

同社の西尾社長は、「世界記憶遺産登録を受け、本来あるべき田川で有効に活用していただきたい」と話していました。



▲伊藤市長（右端）と日本コークス工業西尾社長（右から2番目）ら関係者

れたからである。ダイナモ（発電機）はK坑だけの電灯用で、小型であった。坑夫納屋には内線が2つある。5燭であるがランプより明るく、火災の危険もないので、文明の余光に感激した。

その翌年の明治42年には、福岡市で電車線路ができており、ほとんど完成していた。都会と田舎の差は甚大である。

据えランプは台が60センチ以上の高さ。大納屋が炭坑の上級幹部ぐらいの家であった。

ヤマの子どもの日課は、毎夕方に鍛冶屋（坑口にある）からツルバシを自宅に運ぶこと。素焼（穂先を直す）が、1丁に5厘銅をつけて、2銭5厘から3銭かかる。次はランプの掃除。ホヤを磨くだけではいけない。下部の網目がふさがると、明るくもなるが火災の恐れもあり。また、油の補給も2日に1度しないといけない。

※7 5燭：明るさの単位のひとつ

画中文書の現代語訳

「昔のヤマ人、ウサギ坑夫。ウサギは前足が短く、登り坂は早く駆け上がり、下り坂は遅い。よって、人より遅れて入坑



「ウサギ坑夫」

※8 ホヤ：ランプで灯火を囲むガラスの筒

し、昇坑は一番先にする坑夫につけたあだ名。

どんなベテランでも、入坑時間が人の半分くらいでは仕事にならぬ。スカブラ（急げ者）で、ノソ（サボリ）も時々する（入坑して作業せずに昇坑する）。三池坑（三池炭田）は、ノソのことをヒボテと言うらしい。

このスカブラ坑夫は、弁当だけは食べてあがる。ガガまたはクラガイで竹の身を楕円形、底は杉板上下で、約4合（6百グラム）の飯は詰める。菜入は小形がある。茶はブリキ製で、一リットル以上入る。（水筒は）ガメと称す。

当時、明治32年頃、白米1升10銭、沢庵（コンコン）1本1銭、さつまいも1斤（6百グラム）1銭5厘。

うさぎは、飼いうさぎは耳が長く、野ウサギは短い。

坑内は弁当を食べる場所がない。マキタテがカブダシ場がカネ

カタか。何れも狭い。絵は切羽のカイトである。大根の漬物は長手に切つて、それをスリッパと言う。（レールの枕木）

ヤマによつては、カネカタに落ちたボタがうっ積して、よけ場もない。

※9 クラガイ：竹の中身で作った曲物で、坑夫の弁当容器に使用した

※10 マキタテ：捲立。捲卸から片盤曲片への入口で、空函を裏面に連結しかえて捲き上げる場所

※11 カブダシ場：坑内に石炭を一時溜めておく場所

※12 カネカタ：曲片。捲卸から片盤の方向に、一定の間隔をおいて掘進する主要坑道

※13 カイト：街路。街道。石炭を人力で運ぶ運搬坑道

▲【炭坑画】 © Yamamoto Family



▲WEBサイトトップページ

産に登録された589点の記録画のほか、山本作兵衛氏や記録画が描かれた当時の様子なども紹介しています。

現在は、日本語ページを中心に公開していますが、12月からは英語、韓国語、中国語での閲覧が可能となります。

「専用WEBサイトアドレス」
<http://www.y-sakubei.com/index.html>

問題提起

地域の価値を明日に伝える

—シンポジウム「三重の近代史から地域の明日を探る」の論点—

菅原 洋 （三重大学）

○近代をどう捉えるか

我々の生活は、近世に形成された都市、産業、文化が、近代化の過程で変容したもの。

自分たちの直接的な出自に関わる時代。

産業革命。技術と産業の盛衰。人の流動。

近代の痕跡の断片化、消滅

稚拙だったり、みすぼらしくったり、間違いもあったかもしれないが、我々の出自はそこにある。

○ 近代は近世をどう捉えたか

価値観の変化：廃仏毀釈、廃藩置県、神宮改革

旧物の喪失：放置・放棄・破壊

保護の制度化：古器旧物保存、古社寺保存法、国宝保存法、史跡名勝天然記念物保存法

○ 勸業、殖産興業の博物館

共進会、博覧会、博物館

資源の発掘、評価、活用、創業

○ 技術と産業の盛衰

基盤施設：灯台、港湾、鉄道

産業の連関：農村産業（醸造）→製糸、紡績、万古焼粘土中間層砂→鋳物生型

近代化を支えてきたモノの廃棄、死蔵・埋没、消費

近代の記憶の消滅

○ 私たちの責任

地域の価値をつくってきた、さまざまなものを資源として、明日に引き継ぐ

埋もれているものを資源に、資源をもとに新たな価値の創造

発掘、分析・評価、整理・保存、活用

埋もれているものを資源に変換する装置としての博物館を

◎三重県の中で、近代産業の進展が最も著しい四日市で、地域の価値を再認識し、明日の地域づくりに繋げていく方途を考えていきたい。

新博物館シンポジウム
2011. 11. 19

〔事例報告〕
三重の近代史から地域の資産を考える

明治期の博覧会関係文書から

三重県史編さん専門員
三重大学附属図書館研究開発室客員教授
吉村 利男

1 明治期県庁文書の博覧会関係文書

① 三重県行政文書 県指定文化財 11,643点
② 博覧会関係文書 約130点の簿冊

- ・内国勸業博覧会
第1・2・3回（明治10・14・23年）
- ・県内物産博覧会 明治11年
- ・水産博覧会 第1・2回（明治16・31年）

その他、製茶共進会・山林共進会・東海4県連合共進会などの関係文書があり、明治11年パリ万国博覧会の関係文書も残存している。

③ パリ万国博覧会 県内から20人ほど出品
大半が萬古焼、ほかに生糸、壺屋紙、製茶など

『明治十一年内国博覧会書類』に見る受賞者

銅牌及賞状 谷スミ（萬古焼）
全郡室山村
伊藤小左衛門（生糸）
飯野郡稻木村
池部清兵衛
（壺屋紙・擬革紙）
三重郡八幡町
三木閣斎（萬古焼）
高木閣斎（萬古焼）
朝明郡小向村
森与五左衛門（有節、萬古焼）

2 森有節の出品解説書と窯跡調査

第2回勸業博覧会（明治14年）の森有節出品解説書

朝日町小向の森有節墓碑（移設後、明治15年死去、明治45年建立）

有節萬古窯跡（名谷A遺跡2号窯跡）
朝日町教育委員会提供

有節萬古窯跡（名谷B遺跡）
平成18年県指定史跡

3 伊藤小左衛門と四郷郷土歴史研究会

① 味噌・醤油醸造業（室山味噌）から製茶・生糸への取り組み
② 博覧会への出品 パリ万国博覧会・内国勸業博覧会・県内物産博覧会など多数

伊藤製茶場
（明治36年建築）
昭和62年撮影

③ 地域の研究

- ・田中増治郎氏『萬里の糸』の執筆(平成9年発行)
- ・現在、四郷郷土資料館(郷土歴史研究会)が5世小左衛門に焦点を当てビデオ作成中
(富岡製糸場・横浜開港資料館・日本綿業倶楽部等の調査、蚕の飼養・糸繰り作業等の撮影)



5世小左衛門が購入したアメリカ製の紡績機
(日本綿業倶楽部)

7

4 老農加藤由兵衛と桜郷土史研究会

① 老農加藤由兵衛君之碑

- ・伊東祐賢篆額
- ・明治27年9月建立

② 「老農」とは 農事に通じて明治初期の農業改良指導や技術普及に活躍

③ 桜郷土史研究会が調査研究を進める

- ・本年度文化祭のテーマ
- ・加藤家所蔵の賞状等の調査



8

④ 加藤由兵衛の略歴

- ・明治14年 三重朝明郡勸業会員
三重県農事会に出席
- ・明治15年 各県品種の稲作試験
- ・明治17年 郡勸業会で稲作・肥料につき発言(勸業月報)
- ・明治18年～22年 各種品評会に出品し多数受賞(研究会)
- ・明治23年 内国勸業博覧会に「津桜米」を出品(県庁文書)
- ・明治24年 県農業協会から賞牌、県農業協会農談会出席(県農業協会報告)
- ・明治24年～26年 郡役所・村役場等から多数表彰(研究会)
- ・明治27年8月 逝去、享年65歳(石碑)

明治14年	明治15年	明治17年	明治18年	明治19年	明治20年	明治21年	明治22年	明治23年	明治24年	明治25年	明治26年	明治27年
三重朝明郡勸業会員	各県品種の稲作試験	郡勸業会で稲作・肥料につき発言	各種品評会に出品	内国勸業博覧会出品	県農業協会賞牌	県農業協会農談会出席	郡役所・村役場表彰	逝去				

『第三回内国勸業博覧会出品目録』(県庁文書)

9

5 明治期博覧会関係文書の有効利用を

① 地域の産業を語る具体的な資料

② 当時の近代化意識を知る資料

- ・ウイーン万国博(明治6年)に壺屋紙・形紙の出品、受賞
- ・三重紡績の伊藤伝七が第3回内国勸業博覧会に「イービール」

③ 追跡研究が比較的容易な資料



三重紡績会社(『東洋紡百年史』より)

10

三重県立博物館 サポートスタッフ民俗グループの取り組み
三重の軽便鉄道 ―廃線の痕跡調査―

1. はじめに

(1) 三重県には軽便鉄道規格の鉄道が現在も運行されている。
全国3路線 内三重県2路線

(2) 軽便鉄道は明治末から昭和初期が最盛期。
それは三重の近代化が最も進んだ時期 と同じ

(3) 廃線跡を現地調査して報告書作成。

取り組み理由 ①三重県としての特色がある
②県内に広く展開している
③緊急に取り組む必要がある

1

2. サポートスタッフは

- ・郷土の自然、歴史、文化が大好き
- ・好奇心、向学心、研究心が旺盛
- ・286人が7グループに分かれて活動中
- ・小学生から80歳代までの世代を越えた幅広い層で構成
- ・三重県立博物館のファン

3. 軽便鉄道(けいべんてつどう)とは

(1) 定義

(2) 軽便鉄道法(M43)・軽便鉄道補助法(M44)
近代日本の交通発展過程での中継ぎ役として貢献

(3) 三重県内の軽便鉄道
大正時代～昭和初期は7路線が運行

2

軽便鉄道はこんな大きさ

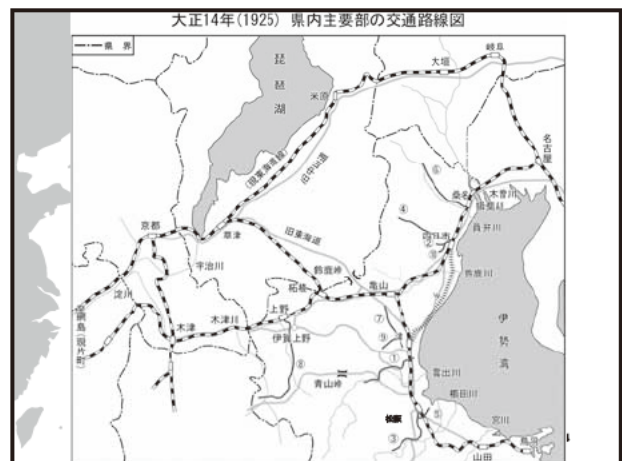
三岐鉄道 北勢線

三岐鉄道 三岐線

平成21年11月14日撮影

軌間はJR在来線と同じ1067mm

3



4. 活動の取り組み

- ・取り組み期間 平成20年度～22年度
- ・メンバーの居住地毎に小グループで担当
- ・定例会議開催(月1回) 活動の中間棚卸
- ・調査活動
 - 調査カード 70歳代後半～80歳代
 - 現地現物主義
 - 全員でフィールドワークも 三岐鉄道北勢線
- ・編集会議
 - 目次で全員の目的意識を共有化 執筆分担
 - 校正 文章作成ルール

序々に達成感が…そして充実感、満足感へ

6

5. 活動の感想

- (1) 全員が初めての取り組みで不安な船出
- (2) 多才で多様な仲間のパワー
- (3) 聞き取りは難しい

6. 調査報告書を作って分かったこと

- (1) 地域の近代化に貢献した
 - ・地域の交通、文化、社会の発展に影響
 - ・文明開化、近代化の証を示し夢と希望を与えた
 - ・地域資産家から産業家へ
- (2) 軽便鉄道は「大量高速輸送」能力がない ⇒ 多くは廃線の運命
- (3) 営業努力、鉄道設備改良、沿線開発、地域の協力、大資本との合併等により三重県では、2路線が生き残っている(全国でも3路線)

7. 読者からの反応

- ・自分の話が「本」になり記録として残されるのは嬉しい。
- ・報告書を見て、自分も現地へ行ってみた。
- ・古地図等、新しい情報の提供。
- ・新しい事実や、表現、解釈についての意見。

8. おわりに

- (1) 現在は「伊勢講」について取り組み中
- (2) サポートスタッフとしての想い
 - 郷土三重の“自然、歴史、文化”を大切にしたい。
 - 何か行動したいという皆さんと
 - サポートスタッフ活動に参加し、体験することにより
 - 三重県全体を博物館に……そんな素晴らしい三重に
 - そして、近代化の証でもある北勢地域の軽便規格電車を
 - 全国へ情報発信したい

新博物館シンポジウム
— 三重の近代史から地域の明日を探る —

『四日市市で地域資産を活用する取組』
～ たいせつな「つながり」～

2011年11月19日
久安典之

1

四日市地域まちかど博物館

対象地域：四日市市・三重郡菰野町・朝日町・川越町
募集開始：2008年7月10日
博物館数：81館(11/11/19現在)
推進委員：12名(館長兼務を含む)
会議：月1～2回程度(推進委員会)
特徴：
・推進委員が比較的若い(40代中心)
・館長の発掘は個人に直接アプローチ
・館長としての参加は自主性を重視
・審査基準は「やる気」を最重視

2

四日市地域

三重県下一の人口
工業都市
旧東海道の宿場町
戦災・伊勢湾台風・公害等の災害
まちかど博物館空白地
まちづくりNPO不在

↓
文化のインフラが必要と感じ、
まちかど博物館のネットワーク化を目指す

3

まちかど博物館の意義

地域文化の掘りおこし



観光
教育
生涯学習
地場産業の活性化
地域内外のネットワーク



地域文化の活性化

4

オープニングイベント
『まちかど博物館
in JR四日市駅』
2009.03.27～04.05



6

**グランド
オープニングイベント
2010.03.20～03.21**



7

**総会風景
2011.07.03**



8

三重県内のまちかど博物館

桑名まちかど博物館:29館(平成15年10月～;22年4月名称変更)
 東員まちかど博物館:6館(平成22年4月～)
 いなべまちかど博物館:40館(平成17年3月～)
 四日市地域まちかど博物館:80館(平成21年3月～)
 鈴鹿・亀山まちかど博物館:46館(平成20年5月～)
 三重のまんなか・まちかど博物館:68館(平成13年3月～)
 松阪・紀勢界隈まちかど博物館:37館(平成15年4月～)
 伊勢まちかど博物館:31館(平成5年～)
 伊賀まちかど博物館:116館(平成12年3月～)
 東紀州まちかど博物館:59館(平成13年2月～)
 三重県内合計 512館(平成23年9月15日現在)



9

その他の活動

- ・四日市ウミガメ保存会(会長代行)
- ・四日市市楠地区まちづくり協議会(街のうらおい部会長)
- ・四日市諏訪西商店街振興組合(専務理事補佐)
- ・諏訪神社活性化プロジェクト(共同発起人)
- ・歴史ゼミナール四日市(協力)
- ・三重県文化財保護指導委員
- ・社団法人日本建築家協会(会員)

10

四日市ウミガメ保存会



11

**楠地区
まちづくり協議会**



12

四日市市
中心市街地活性化



13

諏訪神社活性化
プロジェクト



14

歴史ゼミナール
四日市



15

三重県
文化財保護指導委員



16

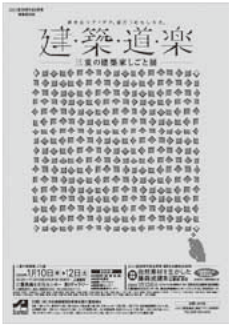
JIA三重
『三重の建築散歩』
ローカル誌に連載中
運営にあわせ出版予定



JIA三重
建築文化講演会
(2008)



JIA巡回建築展：県内各地で開催

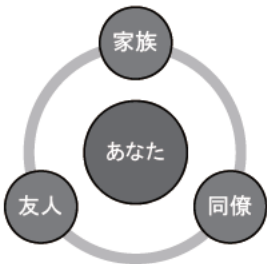


19

四日市市富田一色
街並み調査

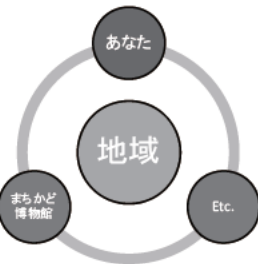


20



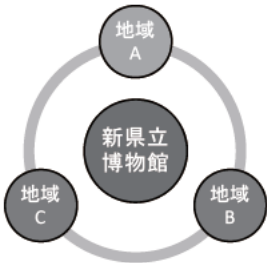
あなたの周りの人や地域資産が...

21



地域につながり...

22



より広い地域へとつながっていく...！

23



24

シンポジウムに関連し、展示ホールでパネル展示を行いました



世界記憶遺産山本作兵衛炭坑記録画について



四日市地域まちかど博物館の取組について
明治期県庁文書からみた四日市



三重県立博物館サポートスタッフ民俗グループの取組



四日市市立博物館所蔵資料からみた近代四日市



三重大学と三重県立博物館との連携の取組



三重の新県立博物館について



見学者の様子



パネル展示会場全景

平成 24 年 3 月発行
三重県生活・文化部新博物館整備推進室
〒514-0006 三重県津市広明町1 4 7 - 2 番地
